

宮川 さ ん

浅草區 富士尋常小學校

第四學年女

久保寺好乃 (十二才)

私と宮川さんは大へん仲よしでした。

いつか宮川さんが、風をひいて學校を二週間ほど休みました。私が御見まひに行きますと、大へん喜んでゐました。その晩、私は宮川さんが病氣がなほつて、學校へ来たゆめを見ました。

私は目がさめて、ゆめであつたのを、くやしく思ひました。

宮川さんか、ゆめで見たやうに、早くよくなつて、學校へくればよいのに。

焼煉瓦の上で

浅草區 新堀尋常小學校

第四學年男

日比野定吉

あんなりつばな學校が、こんなになつたかと思ふと、なんとなくなさけなくなる。

運動場の焼煉瓦だけは昔のまゝになつてゐて、僕らの心をはげましてゐるやうに見える。

足もとにはやけた、びんのかたまつたのや、木のもえかすや、かはらのやけて、われてゐるのや、いろ／＼の物がある。

今日は天氣がいゝので、ふじさんも見える。

家は少なくなつて、小さな家ばかりである。その小さなトタン屋根の上から、大きな石づくりの家が見える。

僕はこれからいつしようけんめい、べんきやうして、はやく大きくなつて、もとの東京よりも、りつばな東京にしようど、思つてゐる。

お話の先生

浅草區 新堀尋常小學校

第四學年女

安西ハナ

去年は大そうひどい目にあつたので、今でも一口話にいはれてゐます。『お前は青い顔をして、おど／＼してゐた』とからかはれます。このやうに、私はおど／＼して月

日を送つたのであります。

學校もばらつくがたつてからの事でした、其日まででない、たのしい事でした。學校のバラツクは大そうせまかつたのでした。

そのせまいバラツクで、横田先生が、たいそう面白いお話をして下さいました。大せいの人が、おなかをかゝへて笑ふやうな、面白いお話であつたのです。あの時ばかりは、みんなこわい事も、かなしい事もわすれたやうにして、手をたゝいて喜びました。

あの日ばかりは家にかへるのも、足がかるく、近所の友だちと一所に、あの面白かつた事を話合つて笑ひました。

あの一日は、何もかもわすれて、たのしくすごしました。

横田先生のニコニコされた、お顔が目につつてゐます。先生の元氣のあるお聲がいつまでも耳にのこつてゐます。

涙の夜

浅草區 福井尋常小學校

第四學年男 平原 勇 治

夜ふと目がさめた。その時、時計が十二時をうつた。すると今までねて居た、お母さんがにはかに、くるしいくといひはじめた。僕は急いで醫師へ行つてみたら、夜中の十二時なのにまだ起きてゐましたが。その時はあいにく醫師が、かみごこへ行つてゐました。

しよせいや、かみごふが、かみごこへむかへにいつて、歸つて來ると同時に、お父さんが、いきもきれ〜にかけて來て、

『先生はおいでですか、病人が青い顔になつてきました』

と言ひました。僕はお母さんに、一大事が出來たのだと思つて、家へかへつて見るとお母さんは弟子のひざをまくらにして、この世をさつて、とほい天國へたびだつた。

僕や、お父さんが、なげごさげご、一たん天國へ行つたお母さんは、ふたゝび歸つてきてはくれないのだと思つて、思はず涙を落した。

火におはれて

浅草區 福井尋常小學校

第四學年女 高山満壽代

私たちは、あのおそろしい大震災火災の爲に、焼出されて、上野の山で一夜を明しました。

見ればまだ火は盛んにもえて居ます。時々地震が来ては、人々を驚かします。お母さんはその毎に、田舎に居るお婆さんの事ばかり、心配しては、目には涙を浮べて居ました。

私たちは、たまらなくなつて、西郷銅像のそばへ行つて見ますと、山は一面人でつゝまれて居ります。私はその時、はつとしました。

そばに居るお母さんを見ると、眞青でした。やがてお父さんは、お言ひになりました。『あゝもう命はないんだ、皆死ぬなら一しよに死なう。』と、私はその言葉を聞いた時、死を決しました。

猿屋町の高木さあん……などと人々の名を呼ぶ聲が、そこからも、彼處からもあはれに聞えて來ます。

少し立つと、皆人が立つて行きます。火は人々にかまはず、ときは華壇まで焼けて來ました。死なうと言つたお父さんも、逃げられるだけは、どうかして逃げやうと、

おつしやいましたから、山を下りて本郷の大學のそばまで來た時、私はのどがかわいてたまらない。水を一ぱい前の家で、いたゞいて居りますと、向ふからなんだか馬道のをばさんによく似た人が來ましたから、お母さんに言ふと、お母さんは『あゝほんどだ』と言つて居ると、をばさんは氣がついたと見えて、かけよつて來ました。互に涙を流しながら、立話をして居ると、火はだん／＼とこつちへもえて來さうです。

お父さんと私と、手をつないで少し先へ行くと、をばさんが『どつちへ逃げたらいいでせう』と言ひながら向ふの方を見て居ると、後に居た男の人が『皆さん、どつせんですけれども、私の家は瀧野川ですが、いらつしやいませんか、あたゝかいお茶ぐらゐはありますから』と言ひました。その人の後について行つて、その人の家へ行くど間もなく男の人が來て『二十才位の男の人が、今そこまで來たから、さつきの橋の所で番をして居てくれ』と言つて來ましたので、その家の人は支度をして出て行きました。

私はその時びつくりしました。

その内の人は親切に、布團まで下さいましたので、その晩はお家の中でねる事になりましたが、あまりせまいので、氣の毒でたまりませんでした。けれどもあ

たゞかい心持で、どこの中に入りました。

大地震

浅草區 松葉尋常小學校

第四學年男

芝 田 芳 松

大正十二年九月一日午前十一時五十八分、おそろしい地震が起つた。家のたほれる音、人の叫ぶ聲で生きてゐる心持はしない。

東京名物の十二階は、何時の間にかくづれ落ちて、五六階の所から盛に火を吹いてゐる。

忽ち火の手は八方から起つて、東京は火の海となつてしまつた。

猛火は段々くるつて、逃げる場所、逃げる場所と追つて来る。

僕は命からがら、上野の山から飛鳥山へ逃げた。

二三日たつてから、焼あとへ来て見たら、なつかしい我が家も我が學校も、かげも形もなかつた。

僕は其の時なんとも言へない心持がした。

慰問品

浅草區 松葉尋常小學校

第四學年女

入 西 初 枝

今度の震火災で、私どもは丸はだかになつて、お父さんお母さんたちの心配を思ふと、何一つ買つてくれとは言はれません。

あつちこつち立退いて、田舎の學校にはいりました時は、藏内先生の事や、お友達のを事を思ふと、涙が出ました。

さうして田舎の學校の生徒達の學用品を見ると、ほしいとは思ひましたが、家の事を考へては、一人でがまんをしました。

そして、やうやくなづかしい、松葉學校に来て、先生のお顔や、お友達のお顔を見たら、うれしくなりました。さうして、ほしいと思ふ學用品や、着物や、色々の物をいただき、先生がこれはどこからいただきましたと、教へられますと、送つて下さつた大勢の人達の、情深い人の心がうれしくかんじます。

私どもは、これから一生けんめいに勉強して、送つて下された、人達に御恩をかへ

さなければなりません。

『情深い大勢の方に、私は心から御禮申します。』

震災後の心かけ

浅草區 千束尋常小學校

第四學年男

神崎 寅吉

あゝ今まで都といはれてゐた東京も、去年の九月一日に焼けてしまひ、何萬と居た人は三分の一ぐらゐ死んだでせう。九月一日には、まつたく生きた心持はしませんでした。上野の山から見下すと、下は火の海です。多くの人々は、みな火の海の中をぬけて、名々方々へにげます。僕の内ではさいはいに、みんなそろつてぶじでしたが、王子のをばさんの内はどうかと心配してゐました。すると二月月ほどたつて、王子のをばさんがきての話に、みなぶじのこと、それをきき、みんなでよろこびあひました。『これから先はおたがひに心を入れかへて、はたらきませう』などとお父さんがお話をしてゐました。僕は、それをきいて、僕もこれから先一心に勉強して、この東京を前よりも、もつと／＼立ばに美しくしやうと深くけつしんいたしました。

地震の時

浅草區 千束尋常小學校

第四學年女

加藤 雅子

私が學校から歸つて、袴をぬぐうとしたら『ごう』と言ふ恐しい音がして、間もなく家が舟のやうに、ゆれだして棚から色々の物が落ちて來ました。私はすぐに、たんとすにつかまつてゐました。

間もなく地震がすんだので、外へ飛出しました。私はもう家へはいる氣にもなれません。お母さんやお父さんは、一しようけんめいに、荷物を、こうりにいれてなわを掛けてゐます。私はお母さんが買つて下さつた水瓜をたべてゐました。すると後の方から、火事だといふ聲がするので、後をふりむくと、えん／＼と燃え上つてゐました。私どもは一しようけんめいに、逃げる途中で、御父さんに、はぐれてしまひました。一番初めに岩崎さんの庭へ逃げて、それから本郷へゆき、又岩崎さんへ、お父さんをさがしに行きました。

そこでお父さんにあひました。その時は大へんうれしうございました。

今では千束町のバラックにゐますが、前の家よりせまいので不自由ですが皆たのしく暮して居ります。

九月一日の震火災

浅草區 石濱尋常小學校

第四學年男

本橋 龜吉

十二時少し前である。僕がのこざりを出して來ると、がた／＼、みし／＼と地震が來た。その中にござんと前の家がたふれた。少したつと地震がおさまつた。その時は、うちのおぢいさんが横濱へ、仕事に行つてゐた時である。その中に兄さんが來たので、玉姫様へ荷物を出してもらつた。するとすぐそばの、酒屋から火が出たので、荷物を少しづつ持つて、上野の方へにげて行つた。吉野町の所で兄さんとはぐれてしまつたので、おばあさんと、僕とにげて行つた。うぐひす谷の所で、わつしやう／＼と言ふ人におされながら、やつこのことで、上の方へあがつた。

二日の晩に近所の人とあつた。四日の夕方に横濱に行つてゐた、おぢいさんが歸つて來た。僕はおぢいさんにとびついて喜んだ。その時おぢいさんは、こんな話をした。『地震が來ると、べしやんこにつぶれて、やつこのことではい出すと、もう火が來たので、川の中へはいつて、船につかまつてゐた、その中に火事がおさまつたので一錢ももたずに、汽車道をどほつて來て、四日目にお前たちにあつたのだ』と涙をながして言ひました。弟の方も死んだものもなく、けがしたものもないので、やつと安心した。それで、今ではかり小屋にはいつてゐます。

今日のうれしさ

浅草區 石濱尋常小學校

第四學年女

鈴木 すゞ

今考へて見ても、あの恐ろしい九月一日の大震火災のため、私の學校も、まるやけになつてしまひました。

それからは、きゆうくつなテントで勉強をしてゐましたが、今朝急に校長先生が『今日から皆教室に、はいることが出来るやうになつた』とおつしやいましたので、私はとび上るほど、うれしうございました。教室へはいつてみると、机からなにから皆新しく、日あたりはよくて、明るい室で廣々してゐます。今日からこの室で勉強をする

のかと思ふと、うれしくてうれしくてなりません。

僕は十錢銀貨だ

浅草區 小島尋常小學校

第四學年男

太田 俊夫 (十二才)

僕は一人焼の原に残された。焼る時は随分暑かつたけれど、今になつたら少し良くなつた。最う少しやけどが、なほれば、僕は元氣な若者になるのだけれど、僕がこんなきたくない焼の原へ、のこされて居る事を思ふと、なんだか悲しくなる。九月五日頃つめたいかぜに吹かれながら、きもち良くねむつてゐたら、急に耳元で、がや／＼とさわいで居た。うるさいと思つたけれど氣にとめないで、又ねむらうとすると、急に僕をつかんで『やあこんな所に金が落ちてゐるぞ』と大きな聲でどなつて僕をつかんで財布の中に入れた。僕はこの人は餘程不正直な人だと思つた。間もなく『夕刊々々々』とどなりながら書生みたいな人が來た。僕をもつてゐた人は夕刊をくれといつて、僕を夕刊賣りにわたした。すると書生みたいな人が『はいおつりを』といつて、僕の仲間の五錢と取りかへた。それからその人の、かばんの中に入れられた。よく見ると、

僕の仲間が澤山ゐて、がや／＼さわいで居た。その中にはびか／＼光る銀貨が、多かつた。僕みだいにやけどだらけの、十錢銀貨は一人も居ないので、僕は皆から、仲間はずれにされたやうなきもちがして、なんだか悲しくなつてきた。やつと外へ出られたらと思つたら、今度はパン屋に行つた。パン屋の小學生は、僕をつれて、文房具屋へ行つて、手帳を買つた。文房具屋の人は、ずるぶん僕をもてあましてゐたが、今度は僕を、日本銀行へもつていつて、きれいなびか／＼光る十錢銀貨と取りかへてくれた。

九月一日の大地震

浅草區 小島尋常小學校

第四學年女

西山 文惠 (十二才)

私が學校のおどろぐを、そるへて居ますと、がら／＼どしんといふ音とともに、家が左右にゆれはじめたので、家内中でねすみ入らずにつかまつて、ほつと一息ついたと思ふ間もなく、後から後から、ゆりかへしが來ます。あぶないので、大通へひなんしました。皆の口から十二階がたはれたの今どこが焼けて居ると言ふので、よけいに

むねがどき／＼して來ます。夜になると火はますます強くなつて、藏前や、日本橋や三輪は天をもこがすやうな、一面の火の海でした。そこで荷物を車につんで、逃げるやら、泣きさけぶやら、此の世のことは思はれませんでした。私達も皆、にもつをしよつて、火に追はれた人におされながら、やつと上野へのがれましたが、こゝは四方からのひなんみんで、一寸のすきもありませんでした。私達が火の海をながめながらあてもなく逃げたことを思ふと、今でもぞつぞついたします。

大正一日地震

浅草區 山谷堀尋常小學校

第四學年男

笠原 鶴雄

早や學生の喜ぶ長い暑中休暇も、いつのまにかすぎたのである。九月一日學校に行つて來て、私の家に歸つて來て休んで居ると、地なりとともに家はゆれ、戸はたはれ川の水は陸に上つた。舟は岸にぶつかり、こはれ、僕等は初めしやうでん様ににげた。もう其の時は、火はぐるりをまいてゐた。しやうでん様は、あぶなくなつたので、上野山へにげて行つた。其の時浅草で、たつまきがまいてごみがまき上げられたのであ

る。僕等はびつくりして、火事と思つて、一たんあともごりをしたが、火事ではないと言ふことがわかつたので、又上野山をさしてにげた。車坂のじゆんさに、吉野町はやけたかやけないかときいた時、じゆんさは、もうどうにやけたと言つた。僕はがっかりして、やつこのことで上野山までにげた。一日夜中、午前三時頃、上野山も、あぶなくなつたので、本郷の知つてゐる家へにげて行つた。三日の日より、こんどは○人そうどうが起つたので、僕等は、あすか山に行つた。四日には、少し静まつたので、三河島へ行き、九月二十九日にはらつくが出来上つたので、其の日からこちらへ來たのである。

大地震と大火事

浅草區 山谷堀尋常小學校

第四學年女

秋本 たき

それは、ちやうど、お晝の時のことでした。

私がおせんへ向つて、御はんを食べてゐますと、ぐら／＼と家がうごき出しました。急いで表へ出やうと思つて、ごぶへ落ちさうになりました。だん／＼地震が大き

くなりましたので、みんなが『こゝは電信柱がたはれるとあぶないから、お寺の中の方がよいだらう。』と言ひましたので、お寺の中へ入りました。

四方を見渡すと、橋場の方から、黒い煙が出ました。

お母さんにその話をすると、橋場の方を見ました。そうしてゐると、土手の方からも、くらまいの方からも火が來ましたので、内中の者や、近所の者もにげばをうしなつて、皆からみでにげました。

今では東京のあらまは、火の爲に焼けはらはれてしまひました。私たちは一しやうけんめい勉強して、元の東京より、ぶつとりつばな東京にしやうと思つて居ります。

震火災で逃げた話

浅草區 田原尋常小學校

第四學年男

正 木 陽 一

一生忘れることの出來ない、恐ろしい記念日、それは大正十二年九月一日午前十一時五十八分からの出來ごとです。

暑中休暇後の始業式で、學校から歸ると、間もなくだしぬけに、ぐらぐらつ!!と大へんな音と一しよに家は動く、瓦は落ちる、近所の人たちは、皆外へとび出した。僕も家の人と一しよに外へとび出した。少し静まったので、家へはいると、またぐらつ!!ついでぐらぐらつ!!その時表の方で、火事だつ!!といふ聲、外へ出て見ると、太陽は赤黒く、どんよりとして物すこく、東も南も北も眞黒い煙、お父さんに聞くと東のは本所、南のは藏前、北のは十二階の方だとおつしやつた。唯西の上野の方だけが煙がありませんでした。間もなく本所の飛火で、駒形河岸へ火がうつつて、僕の家近くまで焼けてきた。もう夕方に近い頃でした。いよゝあぶない、逃げろと、お父さんがおつしやつたので、僕の荷物それは學校の鞆です。それを肩にかけ、うづまく人ごみの中を、まづ門跡様へ逃げましたが、忽ちうしろの方から、どんく火の子がとんで來るので、とうく上野まで逃げましたが、道は人と荷物と車とで、うづまつてゐて歩くのには、骨が折れました。

恐ろしい一夜を上野の山で明かし、二日の朝、本郷の知り合の家から、おむすびをもらつて來て、食べました。そばにゐた人にも、あげましたら、大それたよこびました。それから、皆と一しよに、瀧の川の高等蠶絲學校まで、逃げました。こゝで始

めて玄米の味を知りました。

四日の朝、千葉縣の行徳の親類の家へ行くことにして、瀧の川から行徳まで、歩きました。途中死んだ人の上をまたいで、厩橋を渡りましたが、今思ひ出してもぞつとします。行徳へ夜中つきますと、皆泣きました。無事でゐたのを泣いたのでせう。僕もなんだか、かなしくなりました。

震災後の私の町

浅草區 田原尋常小學校

第四學年女

野口光代

私が田舎から歸つてきましたのは、十二月末で、雨の降る日でした。母さまの後から車につて、かはりはてた東京の町を通つて、壽町に着いた時には、まあなんといふ有様か、此所が自分のすみなれた、所とは思はれませんでした。

道は焼土が、ごろ／＼になつてゐますし、かはらのかけらや焼けたたん等が山のやうに積んでありました。あちらもこちらも、焼あごでまだ家の出來てゐない所も、たくさんあります。けれども、あちらこちらの、焼けのこつた石垣や、藏などからあそ

こが誰さんの家とか此所が何であつたかなどといふことが、わかりました。

廣い通りにそつた家はとたん板の屋根で、軒をならべてゐますが、せまい裏通りはまだ、ひろ／＼と寒い冬風のふくのにかかせてゐます。今まで田舎で見なれた、草木はわづか一二本植ゑられたのが見えるばかりです。けれども新しい家が、あちらにもこちらにも、一日増しに出來てきまして、だん／＼にぎやかになつてきます。

今まで遊んでゐた人も、一しやうけんめいに、働いてゐます。かうして、私の町も日増しに復興されて、いくのだと、お父さまが申されました。震災前は壽町せんたいで、二千人以上でしたが、今では千七八百人ぐらゐ歸つてゐるさうです。

それで私の一番かなしいことは、小さい時から、今まで朝に夕に、學校の行き歸りに、いつも一しよに遊んだ花子さんが、さうどう秩父で御病氣のため、おなくなりなされ、二度とよんでも、この町へ歸つてこられないことです。あゝなんといふ、かなしい事でせう。

私等の教室

浅草區 金龍尋常小學校

今度私等は、元避難民の居りました所へ、教室をかへました。二日勉強は休みで、出席をつけて歸りました。私と白村さんは、後にのこつて、當番の手つだひをして、歸りました。二日たつてやつと出來上りました。實に美しくきれいに、出來たので、皆さんと一緒に、私は喜びました。三日目に、同級生がみんな集まつて、座をきめました。私は其の日にかぎつて、うれしくて、飛び立つ様でした。伊藤先生と白村さんと私で、元の私等のお座でありました所へ行つて、書方又は圖畫をはりだす所を作りました。又元は隣のお座と、私等の教室とのさかひが、あんべらでありましたけれども、今度は高瀬先生や諸々の先生方が、となりと私等の教室のさかひを、板でかこつて下さつたので、全く元の學校の様な氣が致します。私は教室がきれいになつたと同時にうんと勉強して、ゑらい人間にならうと思ひます。

震災の思ひ出

淺草區 金龍尋常小學校

第四學年女

酒井美惠子

九月四日に私ども親子は、田舎へ行く事になりました。家は焼けてしまひ、ねる所もなし、食物を食べる事も出來ませんから。

向ふの方から、ごん／＼と汽車が來ると、もう我先にとさわぎ出します。汽車がとまると、まごからはいる者もあるし、飛びこむ人もいろいろあります。「おーい何々何々はごこだ、早くこーい」などと汽車の中から聲がしたり「お父ーさん、お母ーさん」と子供の泣きさけぶ聲がします。汽車の屋根、かもつれつ車の上、どこでも乗れさうな所は山のやうに一ぱいです。私はその時日暮里の停車場で、榎戸さんにあひました。榎戸さんは、運よく汽車に乗れました。私たちは乗りおくれしてしまひましたので田端まで歩きました。田端から汽車に乗る事が、よう／＼出來ました。

汽車は出發しましたが、小さい停車場では三十分位でしたが、高崎では二時間位までたされました。そこには「おもゆのせつたい」と書いたかんばんが、出てゐましたが、何もして居りません。汽車の中の人々は「ひなんして汽車でにげてきたのに、こんなにも、またされてはこまる」などと不平を言つて居ります。若い男の人たちは「早く出せ、早く出せ、何のために、汽車にのつてにげてきたんだ、安全地へゆくためではないか、早く出せ、早く出せ、早くだせ」と大きい聲での／＼しつて居ります。いつまでたつて

も出しません。若い男の人たちは『おもゆのせつたいかんばんばかり』と大きな聲でいくども／＼ふざけはんぶんと言つて居りました。一晚中汽車に乗つて午前九時か十時ごろ、もくてきの篠井につきました。ふつうは九時間か、れば、篠井へ行けるのですが二十三時間かゝりました。見渡すかぎり廣々として、山がいくつとなくついでに居ります。私は『まあいゝ所だ、こんな所にすんだら、さぞうれしいだらう、これから此所にすむのだから、うれしいな』と思ひました。停車場についたら、お父さんの兄さんの新一おちさんが、せめて私たちのおこつても、ひろつてきたいといつて、汽車に乗らうとした所であつたのですが、彌一おちさんのおばさんは、おちさんをおくりに来て居りました。

七ツの顔が向ひあつたしゆん間、十四の目から涙が、とめどなくあふれ出しました。新一おちさんは、ぶじたつたかと言つたまゝ、顔をそらして涙をぬぐつて居ります。父は兄さんといつたまゝ、子供のやうに無言のまゝ泣きました。おばさんは涙の目のまゝでそこらのお菓子屋で、きやらめるをかつて来てくれました。母とおばさんは、たがひに、なつかしさを、かたりあふのでありました。

私ども兄弟は、車で先におくられました、雪ちやんは美ちやんと、いなごを取つて

居りましたが車を見ると、ふしんさうに見て居りましたが自分の家へはいると、さつそく飛んで來ました。

私たちは、しばらく家が立つまでいつしよに、こゝでくらししました。

地震と火事

浅草區 清島尋常小學校

第四學年男

間瀬

昇

九月一日のちやうどお晝頃でありました。學校から歸つて、晝の御飯を食べて居た時、グラ／＼と大きな地震がきました。私はいそいで外へ出しました。私の家を見るとき家が西の方へ、少したふれて居りました。ごこの家の人も、皆外へ出しました。少したつと東と南と北の方から火事の煙が上つてきました。それから大切な書類等を、ふろしきに包んで道へござをしき、そこへ置いて、皆と話をしてゐました。すると『十二階がたふれて、大勢の人が死んだ。』と言つて皆に話ながら行つた者がありました。火も割合に近くなりました。僕と兄さんは、田舎で買った水眼鏡をかけて合羽橋の方へ行くと、火がすぐそこに見えました。やがて改正道路まで、火がきたので、荷物を皆

一つ残らず海禪寺の墓地へ出しました。皆が『今夜は此所で寝るのだ。』等と話をしておきました。入谷の大久保湯が焼ける時に、一枚の紙が飛んできて、海禪寺の瓦のない所へ落ちて大きなお寺も五分とたない中に、焼けてしまひました。お寺の墓地があふないと言つて、大ていの者が上野へ行つてしまひました。其の夜は上野の汽車の中で寝てしまひました。明日になつて、目をさまして見ると、まだ火が消えてゐません。お晝頃になると、知らない人がおむすび等をくれました。もう汽車もあふなくなつたと思つたので、みんな山の方へ行きましたが、私と姉さんと二人きりで、お母さんと兄さんで、お父さんは一人で三組に分れてしまひました。私は本郷の方へ知らない中に行つてしまひました。其の夜は、そこで明かしました。明日になつて、又上野の方へきましたが、雨が降つたので、美術學校へはいりました。少したつて雨がやんだので東照宮前の警察へ行つてゐました。警察では色々の物をくれました。その夜は警察で寝ました。明日の朝お母さんとやつとあひました。それからすぐ水久保へ行きました。

九月一日

浅草區 清島尋常小學校

第四學年女

若 林 君 江

學校から歸つて御飯をいただいて終つた時、あの大きな地震が二度も地をゆり家をふるはしたので、私達はみんなびつくりしてしまひました。そして近所の人達が、少しづつ荷物をもつて逃出すときには、もうくらくなつてゐました。ひるまからおこつた火事は、なほどん／＼ともえてゐます。そしてだん／＼火がそばへよつてくるやうなので、車に一だいの荷物を積んで、上野の汽車道へもつてゆきました。そしてその晩は汽車の線路の所へふとんをひいてねました。けれどもたえずくる地震に、よくねられませんでした。そしてすこしねむつて、おきて見るともう朝でしたけれども、まだ火事はきえません。そしてもうこの東京をみんな焼いてしまふのだといふやうに、どん／＼もえてゐました。私達は十時頃三河島から、むかへに來た人達と三河島からのおぢさんの家へ行きました。そしておはんをいただきました。そしてだんだん夜になつてから、車に四だいはかり荷物をつんできました。そして御飯をたべて、又いきました。晩になつてから、こつちへ荷物をもつてきた後、上野の線路の所では、お母さん、お父さん、おぢさん、おぢさん、おぢさんが待つてゐましたが、又行つた時はもう火が

来て荷物のそばへいかれないのでかへつて来てしまひました。その時線路のそばにゐたお父さんと、お母さんと、にいさんと、姉さんは、そばに汽車があつたので、汽車にのれば赤羽までにがしてやるといふので、すこしばかり荷物をもつて、汽車の中へはいりました。あまり人がのつたので重くて、うごきませんでした。そのうち火が来て、汽車へうつたので『早くにげろ、にげろ、にげなれば焼死んでしまふ』といつたので、何も持たないで、にげて三輪のガードの下に家の知つてゐる家があるのでもそこへ行きました。その時私達があつたところは〇〇人が二百人もきて火をつけたり井戸へ毒を入れたりするといふのでこはくてたまりませんでした。けれども、そこは運送屋なので、馬があるので馬屋の中へごさをひいて、ふとんをかけてねました。すこしたつと、うわーと大きなこゑがして、中で誰かがあつまれーといつて、ふをならしました。そして、わいわいいつてゐるので、こわくてたまりませんでした。そして、夜があけてから、四人が来たので、私はもうお母さんや、お父さんがきたから大丈夫だと思つて、やつと安心しました。

ばらつくのやうす

浅草區 玉姫尋常小學校

第四學年男

高橋新治

私の家はばらつくです。やねも、まはりも、やけどたんでできてゐます。そのとたんはみんなちいさい穴があいてゐます。

家もちいさくなつたし、おかつてもおしいれも、ちいさくなりました。そしてふとんも、すくなくなりました。ひばちもないので、ひばちのかはりに、ゐろりができてゐます。

あまり大きな風がふくと、穴から家の中へ、風やごみがはいつてきて、大そうさむくるしうございます。又あめがふることもりますので、もる下へばけつをおきます。いろ／＼の物がちいさくなつたり、せまくなつたりしましたので、大そうふべんです。

恐ろしかった九月一日

浅草區 玉姫尋常小學校

第四學年女

高岡コト

九月一日に私どもはひさしぶりでたのしく學校へ行きました。りんがなると、みんなあつまつてしきがありました。それが終つて、私どもはかいらりませんが、まもなくおひるになりましたので、ごはんをたべてゐると、あの大地震で家がつぶれました。私と母と弟と三人は、家の下になりました。しばらくたつて向のおばさんがだしてくれました。おもてへでましたが、父と兄がくわいしやからまだかへつてこないで、すいぶんしんぱいしました。しばらくたつと、父と兄がかへつてきましたのでうれしかったです。

それから八まん山へにげやうとしますと、母はけがをしてうごけませんので、父におぶさつてにげました。八まん山へ行つたら、あのたつまきにあひました。こゝではあぶないから向島へにげやうといつたので、向島へ行きました。こゝでも又〇〇〇〇〇〇人さはぎで、私はすいぶんおどろきました。向島へ四ばん、すみだはらをしいてねました。私は三日の間少しもごはんをたべませんでした。お母さんのけがは今になほらないので、まことになしくてなりません。

九月一日の思出

本所區 牛島尋常小學校

第四學年男

小林 清 一 郎 (十二才)

僕は火事だと聞いてさつそく大雲寺へ逃げこみました。するとたちまらたつまきにまきこまれて、おどろいて外へ出ました。そして僕の上つてゐる、柳元尋常高等小學校の體操場へは入ると外の方から、おまはりさんが早く出ないと死ぬで早く出ろ〜と一生けんめいに、さけんで居ます。そこで僕は妹を、をぶつて逃げ出しましたが、お父さんやお母さんや弟が來ませんから、僕は聲をはり上げて、お父さん、お母さんとなきさけびました。するとお父さんやお母さんは、僕の呼び聲をたどつて逃げて來ました。僕はそれから龜戸をさして、一目散逃げて行きました。途中で大勢の人達にをしつぶされる者もあり、ごぶの中へ落ちる者もあります。そしてどう〜栗原橋まで來ました。橋を渡る時橋は、ぐらく〜ゆれて、今にも落ちそうです。やう〜渡つて龜戸のしんせきの家へ逃げてほつと一いきつきました。

ひ な ま つ り

本所區 牛島尋常小學校

第四學年女

岡 本 榮 子 (十一才)

桃のお節句ごんなに私たちは、此の日を待たせう。いつもなら、もうお庭の梅もひらきはじめて、一年にたつた一度お出になる、おひなさまを家中そろつて、ごんなに喜んで、そして楽しくおむかへしたでせう。まづ奥の間には紙ひなのかけ物を、お父さまのお作りになつたひなだんには、真紅の布がかけられて、親王様を始め順々にお母さまや、お姉さまによつて美しくひなだんの上に置かれるのである。私たちもおひなさまのごちそうを運んだり、お道具を組立たりすることにいそがしい。こんなにして、にぎやかな楽しい桃のお節句は来るのである。夜はぼんぼりもつけられて家中の人がおひなさまの前に集つて、お白酒やまめいりをいって、おひなさまと共に楽しむのであつた。今年も、もう小さなさびしいバラックにも桃のお節句はきたのである。しかし私たちは此の家にかざるおひなさまもかけ物もお人形もかげも形もなかつた。私は今更にこんな楽しいなつかしい過ぎつた日を考へられずにはいられなかつた。先生はおひなさまのない私たちの爲に、かはい、紙のおひなさまを教へて下さつた。それはひし形の美しい千代紙ではつた、小箱の中に小さな紙びなをかざつたものである。私はそれをお机の上にかざつた。おひなさまには小さいながら、まめい

りとお白酒も上げられた。しかしそれには私の大すきなあんなに大切にしてゐた、お人形はなかつた。これを見るにつけても、昨秋の大災害がごんなにうらめしいか知れない。しかしかわいらしい、おひなさまは自分の力でつくつた物であると思へば又力強いうれしさもあつた。

大 地 震

本所區 明德尋常小學校

第四學年男

高 野 寅 治

大正十二年九月一日の出来事、此の日、朝、夕立の如き大雨有りて、僕は高い足駄をはいて傘をさして學校へ行つた。

暑い時とて午前中の課業をへ歸には砂ほこりが立やうな道になつた。僕の内は學校と同じ町内に有つて、父母と兄弟とで十一人の家族であるが、二人めと三人めの兄さんは見習にでておるのであつた。一番の兄さんは商用で、僕が學校へ行く前におでかけになつた。僕が學校から歸つてくると、まもなく四人めの兄さんも學校から歸つてきた。父はしやつ一枚で植木の木鉢を作ておられた。晝飯の仕度が出来たので、皆で

食べやうとした時、午前十一時五十八分で有たといふ事だ。

なにやらものすごい音がすると思ふと間もなく、家もつぶれんばかりに、震動し僕などはあちら、こちらさまようばかり、近所の人々もさはぎたて、時々震動するので内にはおられず、電車道へ出て、戸板を敷てかたまつて居る内に家の下敷になつて死んだ人、けがをした人などあると聞き、こはくしてゐるうちに、火事がはじまつた、見ればあちらこちらに、火事らしい煙が見える、地震はまだやみさうもない。

父母は内の荷物を運び初めた。僕も手助をした。火が僕の内に近くなつたころ、風がにはかに僕の内の方へ火をおうて、火は風をおこしにげるよりほかなかつたのである。あまり火がはげしいので、大勢人がでて、父母と共に、にげる事出来ず、兄さんに、つれられ、火のあるうまや橋を渡り、上野の山にのびたのである。この時三時半ころだと思ふ。あの廣い山が人でいつばいで有つた。きのごくなのは、けがをした人や、老人で有つた。日は暮れかかつても父母や、兄さんにあはれんで、二人でさがしあつた、人々も、家々の者をさがし、あるくこえは、じつにさびしいもので、僕もすいぶんないた。兄さんに、はげまされて、上野の山で一夜ねたが、人のこえで、ねむられなかつた。夜は明けて、晴天であつたが、黄色の空であつた。おなかもすいた、

御金は兄さんが文具を買つたおつりを、九十錢位有つて居たが、賣る店がなかつた。二日の十時ころ、父母とあい、それから、げん米のごはんをたいてもらつたが、それはくはうまかつた、一番の兄さんと、姉さんと兄さんの次男が、わからなかつた。午前皆で駒込へにげた、姉さんも、兄さんと、一つしよで、無事で、有つたが、九月六日まで、合れなかつた、父母も、僕たちも、大そうしんぱいした。僕の内は、運よく皆無事で有つたが、聞ば、ヒフクジャウへひなんした人たちは、皆しんだそうだがおきのごくのこゝである。父母をなくした子供も、澤山居ると聞いた。六十何年前安政二年の地震は、夜中で有つたと、云事で有るが、一そうあはれの話も有つたであらう。

九月一日

本所區 明德尋常小學校

第四學年女 明石ヒサエ

九月一日の日は、朝から上天氣でありました。この日には學校に、しきがあつたので、私は、やうふくをきて、學校へゆきました。やがて、しきがおはつたので歸つて

来て、お晝の御飯をたべてゐますと、がた／＼とふるへ出したので『あゝじしんだ』といつてゐる中になほ、ひどくゆれたので皆んな、たんすの下へゆきました。すこしやんだと思つて外へ出て見ると、又ゆりかへしが来たので、おどろいてたんすの所へ来ました。その時、内の佛だんのおいはいや、とだなの色々な物が、おちたりたほれたりしました。それと一所に、前の内のおくらがたほれた時には一同は、耳をおさへてゐました。すると石原の方から、どん／＼火がくるので、お父んは『これはもうだめだから、にもつを、吾妻橋へ出そう』といひましたので、お父んは『これはもう皆んな出して、さあ、これでいゝといつてゐるうちにさつぽろから、火が出たので、にげていつてしまひました。内へのこつて居たお父さんは、すぐかり橋へいつてようだんすや、なにかをもつて浅草へ行きました。その途中で皆んなにあつたので上野の山へひなんしました。』

僕はたすかつた

本所區 中和尋常小學校

第四學年男

澤田 慎之

大正十二年九月一日は大震災であつた。僕がひる御飯を食べやうと思つて、御せんの前にすはると、ぐらりと地震が始まつた。始はぐらりと、ぐらりと、ゆれてゐた。お母さんがおぢいさんに『外へ出ましようか』と言つた。おぢいさんは、お酒をのみながら『なに大丈夫』と言つて外へは出なかつた。すると『ガラガラガラ』といふ、ものすごい物音がしたかと思ふと、なやがつぶれた。がべもをらるし、ごみもおちた。地震はますますつよくなる。さすがのおぢいさんもたまらなくなつて、皆んなで外へ出た。おばでは砂利船のせんごさんが砂利をあげていた。船頭さんはおぢいさんに『えらい地震ですなあ』と息をきつて言つた。又地震がきた。船頭さんは又『あぶないから船へおのりなさい』と言つた。皆んなは船へのつた。又方方の人も船へのつた。まもなく火事が始まつた。みるみるうちに、四方八方火事になつた。お母さんが『早くにげませう』と言つたから皆んなをかへあがつてにげ始した。火のない方へ向つてにげていつた。始は高橋の方へいつた。にげいく人は黒山のやう。たいほうのやうな音が方方でしてゐる。そのたんびに黒けむりがぱつと立つ。まるで戦争のやうである。僕はやうやう高橋をわたつた。こんどは越中島の方へ向つていつた。やうやうのことで越中島へいつた。越中島で一時間ぐらい休んでゐると、火がぱつとたつた。こんな所にあつた

は死んでしまふと思つてにげだした。にげ所がないので相生橋のたもとへいつた。火の勢はいつそう強くなつた。僕はここで、死のうとかくごをきめてどこへもいかなかつた火事はやうやうきへた。おごろいたこと、どこからどこまでやけ野原になつたの
で方がくがわからなかつた。

復興に向かつた東京

本所區 中和尋常小學校

第四學年女

桐山 ます

あゝ一じはやけ野原となつた、東京もおひくくと、バラツクのかすがふへて來る。東京も復興にむかつて行く。

あの恐しかつた震災を忘れた様に、日一日とさかんになつて行く。バラツクの店もりつぱになる。人々はうれしそうに、復興につとめてゐる。労働者も復興をまつかの様に一生けん命になつてゐる。

私は皆さんと一つしよに、一生けんめいに勉強して、このあれはてた東京を、もつとく盛んにして行きたいと思ふ心はいつもはなれない。

それからぼか／＼暖くなつて、このやけ野原にも草のめがでるだらう。東京にも春が來たのだ。
この春にさそはれて私たちは、これから世の中の幸福をいのりませう。すべては復興にむかつて行く。

震災で死んだ家の鶏

本所區 本所尋常小學校

第四學年男

早川 俊夫 (十二才)

家の鳥はかわいい鳥、僕が米をやると、すぐによつて來てうれしさうな聲で、米をたべ、おすは、勢よく、コケッコと鳴く、僕は學校から歸つて、澤田さんの家で遊んでゐると、いきなりあの大きな震災が來た。
家の鳥も、おごろいたのか、大きな聲で、コケッコ／＼と、四匹とも鳴いてゐた。

僕はその時鳥のことは、ちつとも思はず、母や妹のことばかり思つてゐた。
それから、外へ出たが、まもなく、大火事になつた。

僕はその時、被服廠の中にはいつてゐたので、大へんに苦しんだ。その時鳥も苦しんで、死んだだらうと思つた。焼野原になつてから、このごろ學校へいつて、歸りに、家にゐたやうな、鳥が眼についた。

中尾さんの家のである。

僕は立ちごまつて、しばらく見てゐると、急に悲しくなつた。そのうちに、考へたことが、ずいぶん多い。

家の鳥もあんな鳥であつたと思ふとなんとなく、又かなしくなつた。

家の鳥はごうして死んだだらうと思ふと、つぎからつぎへと、鳥のやうすが目にうかんでくる。

僕は、鶏が大すきだつた。

お 母 さ ん

本所區 本所尋常小學校

第四學年女

久 次 米 清 子 (十二才)

……清子……

呼ばれた様なのでふり向いて見ると誰も居ません。うちのお母さんはあの九月一日の恐しい大火事で死んでしまひました。

うちの人はみんなお母さんの死んでしまつたのを『あんなに方々が火事にならない中に逃げれば死ななかつたんだけれども』と言つて残念がつて居ます。私もお母さんの死んだのが、なにより悲しいのでございます。

お母さんはそれは、よいお母さんでした。そして忘れもしません。去年の二月九日にお母さんと、としちやんと、私と花やしきへ行きました。花やしきへ入ると桃の中からよく太つてゐる桃太郎がとび出したので、おちいさんやおばあさんが驚いて、こしをぬかしてゐる所が、よく出来てゐました。

少し行くとき大きな象が居ました。するとお母さんが、『まあ大きな象ですわね』とおつしやつたやさしいお顔が、今だに目の前にちらついて見えます。

お母さんがゐらつしやる時分は髪がとけなくなると、いつて下さいましたが今では髪がとけなくても一人でとかさねばなりません。夕暮や朝などはお母さんがみんな御用をして下さいましたが、今では私一人でおちや

わんを洗つたりぞうきんがけをしなければなりません。

私はお母さんのいらつしやる人は、どんなに仕合だか知れないと思ひます。そしてよその子が、お母さんやお父さんと、かつどうへ行くのを見ると『うちにもお母さんがゐらつしやれば、私もあゝゆうふうに、かわいがつていただけるとだけれども』と思ふとあつい涙が流れ出ます。

この間龜戸へ行きました。『おばさん今日は』おばさん『今日は清子さん、ここにいろ／＼の寫眞がありますから御覽なさい』とおつしやつたので、一枚の寫眞を思はず取上げました。

するとそれはお母さんの寫眞でした。

私はその頃お母さんの事を思はなくなつたのに、又思ひ出して『あゝお母さんは今頃は何をしていたらつしやるんでせう』と思ふといくらおばさんのうちでも泣かすにはあられませんでした。始の中は涙ぐんでゐましたが、しまひにはとう／＼流れ出ました。その時ははづかしい心地もなく、泣いてしまひました。うちへ歸へるともう夜になつてしまひました。

火鉢によつかかつてゐる中に、又思ひ出して『お母さんにもつと／＼孝行をしなけれ

ばならなかつた』とひとりで思つてゐました。

こんなにもく／＼してはいけない、これからはお父さんに孝行をしてこんな事を考へるのをやめやうかと思つても、どうしてもお母さんの事は忘れられません。

わたしの妹

本所區 本所尋常小學校

第四學年女 中村 くに (十一才)

わたしのすきな妹は

あの堅川で死んだのか

今になつてもかへらない

水で死んだらくるしかる

火で死んだらあつかう

わたしのすきな妹は

今どこにゐるでしょう

あの堅川の水そこか
あのおそろしい火の中か
一人で泣いてゐるでせう

地震火事

本所區 柳島尋常小學校

第四學年男

田中 小太郎

いきなりぐらくとゆれて來た。それ地震だと言ふこゑに、おどろいて外へ飛び出た。往來はもう人や荷物で一ぱいだ。ふと見ると向ふの方は火事だ。その中に四方から火が起つた。もうあつくてくたまらない。家が倒れる音や橋が焼け落ちるひびきでうるさい。間もなく、お父さんが會社から飛んで來た。まだ僕の家は焼けないからねえさんが荷物や、道具を運んでゐたが、お父さんが荷物をすてゝにげようさけんだ。間もなく水神森へ來て、親類の家へよつてほつとした。人の話では明日はつなみがくると言つて、又にげ初めた。僕たちもその人々につれられて平井まで來た。いつの間にか夕方になつて居た。ふと西の空を見ると眞赤だ。

僕はあの火の中をにげて來た時の事を思ふと、思はずおそれを感じた。お母さんのお話によると、何萬人といふ人が死んださうだ。花の都とほめられた東京の大半は灰になつたさうだ。あゝこわい。僕は一生忘れることが出來ぬでせう。九月一日といふ日を。

私どもの學校

本所區 柳島尋常小學校

第四學年女

龜田 のぶ

私どもが毎日通つてゐる柳島尋常小學校は、大正十二年九月一日、忘れることの出來ない天災のために、見る影もない焼野原と變りはてました。けれども元の所へバラツクの學校が出來たので、今では安心して學ぶ事が出來ます。ストローブもあり、日あたりもよいので私たちは、大へんに喜んでゐます。教室は板ばりで、一室々々に出來て居ります。教壇の前に置かれてある先生の机、正面にかけてある黑板、私どもの机腰かけなども整ひました。教室ももとは三十あまりありましたが、今は十一しかありません、とても足りません

本所區

四一七

から、一年二年三年四年は、午前と午後とに別れて勉強してゐます。私どもは一生懸命勉強してよい人になり、學校の名をあげたいと思ひます。

感 謝

本所區 横川尋常小學校

第四學年男 鈴木 利一

大震災災にあつた私たちの心をなぐさめるために、大阪の皆さんから、學用品をはじめ、いろ／＼めずらしいおもちやや、菓子やマントシャツなどをわざわざ／＼おくつていただきまして、おかげで、不自由なく學校に通ふことが出来ます。又あたくしを思つて毎日學校に通うことが出来ます。そして又私の弟に、ちようごよいものをいただいて弟まで喜ばすことが出来ました。家ではお母さんも、姉さんも皆喜んで居ります。私は皆さんの親切なる心を感じしました。私は非常にありがたいと思つて居ります。そしてこの御恩はけつしてわすれません。私もこれからこまつて居る人を、親切に助けてやるやうな心がけを、もちたいと思ひます。そして又よく勉強して、よい人にならうと思つて居ります。

火 ぜ め 水 ぜ め

本所區 横川尋常小學校

第四學年女二組 山中 千代子

ずうんぐら／＼と波がゆれてくるやうに地面がゆれだした。私は後へひつくりかへりそうになりましたので、地面にすはつて、しまつた。見ると、家はつぶれる、かはらはおちる、ほこりはたつ、上へ下への、おほさわぎです。地震のとまるのをまつて家へかけこみますと、家ではお母さんが、きちがひのやうになつて私をさがして居ました。

そして家内一同がそろつたかと思ふと、又二度も三度も、ぐら／＼／＼。御父さんがみと様へにげろ／＼／＼とさげびましたので、お母さんや私たちはみと様へにげました。

そしてみと様でおそろしかつた話や、こゝは大丈夫だななどと、話をしたり、ごはんをたべたりしてゐた。すると、まもなく、つむじ風がふいて来て、みとさまは一面の火になつてしまひました。さあどばかりに、人々はみんなどてに、にげてしまつた。

そのにげる時に家内一同は、ばら／＼になつてにげました。みごさまがやけてゐるの
で、ごてにはあつくてゐられませんが、たいていの人は川の中へはいつて、およひ
でゐる人もあれば、櫻の木へひもを結んで、それにつかまつてゐる人もあつた。

その時ねえさんが『あつくてゐられない』といつて川へはいらうとした。すると兄さ
んが『はいつていけない／＼』といつた。いふ間もなく六つになるいもうとを、おぶ
つてゐたねえさんは、あゝと言ふ間もなく、おされて川の中へおちこんだ。私と兄さ
んと弟は櫻の木の枝につかまつてゐた。

すると私がつるりとすべつて、川の中へはいつてしまつた。すると兄さんが私をたす
けやうとして川の中へはいりました。又弟がすべりこんでしまつた。その時もうねえ
さんは見えなかつた。さいわいにそこへ、しんるいのおちさんが來たので、一人一人
あげてもらひました。

私はあゝよう／＼のちがたすかつたと思つて、うれしい涙をこぼしました。もうそ
の時は火ももえきつてしまつたし、夜はあけましたから、私と兄さんと弟はふるへな
がら、お母さんをさがしにゆきました。お母さんとあつた時には言葉も言へないくら
いうれしかつた。お母さんが、あゝよかつたすかつてゐてくれた。とおつしやつた時に

は思はず皆がなき合つてよろこんだ。

大 き な 餘 震

本所區 江東尋常小學校

第四學年男

圓 城 一 男

一月十三日十四日すいぶん暑かつた、内のお父さんは冬にしては暑いと言つて居た
十四日の晩におち／＼眠むられなかつたさうです。十五日の明方であつた。僕がはば
かりに起きたのが五時五分ではあつた。床の中に入つたのが五時十分頃でした。うと
／＼と寝てゐてからまもなくでした。地ひゞきがしたのでへんに思つて目をさますと
『地震だ』といつて、ねまきではだして外へとび出した。あまり地震が大きかつたの
でころんで、かきねの所へようやくつかまつた。お父さんはなか／＼出てこないの
内の所までかけていつて見ると、お父さんが出てきたので安心したが、ゆりかへしが
くるといつて雨戸を外してこの上にあるといつたのでゐたらよいあんばいに、ゆりか
へしはこなかつた。夜が明けてから向島の家が心配だといつて、電車で行かうとした
ら電車がはしらないので、あるいて行つた。ちようごその時は、お母さんはゐなかの

おばあさんが死んだのでおなかへいつた後であつた。電信柱にはつてある號外を見る
と九月一日の餘震だそうです。

おなかに避難するまで

本所區 江東尋常小學校

第四學年女

宮 川 喜 美 子

私は此の震災について書いて見ませう。

私と妹と一しよに學校で式をすませて、家へ歸つて來てから『姉さん遊び』をして居
りますと、おとなりのおせんべ屋のおばあさんが、家の妹をかまひに來ました。そし
て『なし』のかはをぐみための所へすてに行くこと、『ぐらつ』と家が動いたのでびつく
りして『キヤツ』とさけびながら家へ飛込みました。妹とお母さんは電話の下へち
みながらすわつてゐました。私とお母さんは神様の半分柱の所につかまつて、一生け
んめいに『おきやう』をとなへて居りますと、とつせん『ガタン』といふ音がしまし
た。見るとそれは五十人だきのなべが、たなからおちたのでした。その中に『ガタン
ビシャン』といふ音がしました。それはおとなりの材木が倒れたので御座いました。

外の方はほこりでひごう御在ます。その中にお父さんが工場から飛込むようにして家
へ入りまして、上り口の敷居の所へ足をまたいで上の鴨居へ手をやつてゐる姿は、ま
るで鬼のやうでした。するとゆりかへしが來ました。ゆりかへしもすんでしまふと近
所の人が『おかみさんを早くあきばの原へおやりなさい』といつたので家の小ぞうが
お母さんをおぶつて、原へまいりました。前からお母さんは足が悪くて不自由な
す。その時急にお腹のすいた事をおぼへました。すると家の近所に高城といふ車のも
んや、色々のもんを書く商賣人がありまして、その人がパンを買つて來てくれたので
お腹が一ぱいになりました。そうすると家の小僧の時治といふものが、ばけつに水を
いつぱいくんで持つて來ました。私はその水をのんでおちようずをしようとするど又
『グラ／＼』とゆれたのでびつくりして戻つて來ました。すると四方八方が火になり
ましてから『ごん／＼』いふ音がしました。近所の人が『つなみの知らせだ』とい
ふ人もあれば『いやあの音はばくだんの音だ』といふ人もあります。四時半頃になる
と秋葉の原から火が見える程、近くまでもえて來ました。私は友達と別れるのがかな
しくてなりません。その中に家の近所がもへ出しました。私の家が焼けたのは夜の十
時頃工場も母屋も灰となつてしまひました。私はいよく仲のよい友達と別れねばな

りません。涙ながらに別れました。そうしてお母さんは神様の御身をバスケットに入れて前へかつぎ、それから私たちの古い『カバン』へお金を入れてそれをさげて松坂屋の後の方へ行きました。もう少しで松坂屋へ着くと思ふと、かもつ汽車が焼けるといつてずーつと來ました。私たちは仕方ありませんから垣をこえて松坂屋の方へ參りました。私たちは松坂屋の後手で夜を明かしました。私はこはいのでねませんでした。夜の空は眞赤でした。夜が明けますとお父さんが來ました。そうして『松坂屋の方はあぶないからあきはの原へ歸らう』といひました。私は坐ぶとんを十枚しよつて、お母さんのかけてゐたお金の入った『かばん』をさげてバスケットを一つ持つて行きました。妹は大きな、やくわんをさげて行きました。お母さんは足がいたいといつて何にも持たずに行きました。お父さんや小ぞうは、ふそんだのをかついであきはの原へ行つて見ると、大きなねずみいらずが出てゐました。それは時治といふ者がだしたのです。中を明けて見ると、さどうのかめがありましたから、ふたを取つて見ると中にはたくさんのおさどうが入つて居ましたから、一寸なめるとおいしかつたので妹をよんで、二人で半分程なめてしまひました。お晝近くになると、お父さんがきりぶち病院が焼けるといふので私の家の焼あとへ避難しました。お母さんがお父さんに『こゝ

はごこだらう』といつて聞くとお父さんは『こゝはお前がたんせいした家だ』といひますとお母さんは思はず『ワーツ』と聲を立てて泣きました。私も共に泣きました。三日までは何にも食べませんでした。四日目にはお父さんの兄さんが來ました。そしてお母さんの顔を見ると『オー無事か』といつて喜びました。兄さんはいつものくせでさけをのみたがつて居ります。お父さんが二日の日におさけやから、もらつた酒をのませると喜びました。その晩はもうもえる所がないので、炎も空へのぼりませんでした。ですからそこいらは眞暗です、ちやうちんをつけて兄さんがおつけをこしらへて下さいました。お味そはこさないのですから、丁度なつどのやうです。私はそのおつけをのんじお母さんに『おつけのみはなつどのやうだね』といふとお母さんは笑つてゐました。そうして五日も過ぎ、六日もすんで七日の日にゐなかへ、歸ることになりました。兄さんと立つ時お母さんは『身體を大切におしよ』といはれました。それからだん／＼ゆく中に一番死人を見たのは本所でした。かめいごまで歩いて行きました。汽車にのつて佐倉まで來た時下ろされました。下りてとけいを見ると十二時半でした。佐倉で二時間も待たされました。汽車にのつたのは二時半でした。銚子に着いたのは三時四十分過ぎでした。四日も待つとお母さんが來ました。そしてお母さんの

所へ行つて、ホット息をつきました。それから學校へ上りました。田舎は東京より後れてゐます。田舎で一ヶ月程上つて此方へ來ました。

被服廠跡でたすかつた

本所區 二葉尋常小學校

第四學年男

宮 下 正 次

九月一日僕は家で御飯を食べようと手を洗ふ前の事であつた。急にめり／＼ぐわら／＼と家が左右にゆれ出した。僕は二階へ上つて見ると、裏の那須さんの家の物置きが一度目の地震ではれてしまつた。僕は下へ下りて見るとげんくわんの硝子戸がこわれてしまつた。それから六人そろつて横網の被服廠跡へ行き、僕はお父さんと二人でお母さんも兄さんもその上の兄さんも姉さんも、皆別れ別れになつてしまつた。僕はお父さんと二人でせんぶうが來たといふので、江東製氷の機械室へ入つたら僕の上から硝子が落ちて來て、頭を少しけがしました。其の屋根がもえて來て苦しいので、後のまごを開き被服廠跡へ飛び下り、川の中に入り一時間ばかりひなをし方々見まはすと、一面の火でした。とろつこの道のそばに焼木のもえのこりや、焼たんを拾ひ

まはりをかこひ僕は少し寝ましたが、苦しくて水のそばに行き、二日の朝までゐて夜が明けてから外の者を見に行きましたら、安田さんの朝顔園にお母さんが居ました。そこで話をきくと安田さんの池の中であつたかわかりました。少しそこで休んで居ると小さい兄さんが來ました。お母さんは埼玉縣の實家に行き、お父さんと兄さんと僕と三人は越後へ行きました。

お父さんがなくなりました

本所區 二葉尋常小學校

第四學年女

岡 庭 さ く

九月一日大地震がぐら／＼とゆつてきたので、私はよそからかへつてきました。お母さんはしんぱいをしてゐました。するとほうばうから火事が始まつて來ましたのでお父さんがこれではとてもうちに、はいつてゐられないと言たので、中村べつそへ行きました。だん／＼火事ははげしくなるばかりで、被服廠がいつたのでお母さんやお父さんといつしよに行きました。こゝにゐれば安心だと、ござの上ですわりました。少したつとつむじ風が吹いて來ました。みんなはそのまゝにつつぷしてし

まひました。あまりあついで私はお母さんにげまはりました。お母さんがみえないので、私は大きな聲でお父さん／＼と言つてよびましたが、お父さんのへんじがきこいなので、もうお父さんはとてもいきてはゐないと思ひました。朝起きて見ますとお父さんはそこで死んでゐました。私はじつにかなしうございます。

僕 の 家

本所區 茅場尋常小學校

第四學年男 藤 田 喜 正

僕のうちはせまいから、自由に勉強ができませんおまけに姉さんが病氣ですから、なほさらです。僕は此間きいたらお母さんは、土地を持つてゐる人がいいといはなければいけませんと言ひました。僕は早く土地を持つてゐる人がいいと云へば、いいなと思ひます。

兄さんも勉強が出きないでこまつてゐます。僕はそれだからせまい所で兄さんとかはりばんこにしてゐます。

僕は早くうちが廣くなればいいと、まつてゐます。

學校が焼けて

本所區 茅場尋常小學校

第四學年女 田 中 房 子

大震災のあつた二三日後、私が學校へ見に行った時には、あの高い二階だての美しい學校の校しやは火にのまれて跡かたもなく唯、まはりのれんがべいと、焼けがはらがさみしく残つてゐたばかりでした。

私は又早く學校へあがつて、先生やお友だちにお會ひしたくて、學校の始まるのを待ちごうしく思つてゐました。其おもひもやがてかなつて學校は始まりましたが、其れは思つたより、さびしいものでした。先生はあいかはらずニコ／＼したお顔をしていらつしやいましたが、お友だちがあんまり少ないので、何んだかかなしいやうな氣がしました。あくる日から授業がありました。校しやもなく机もいすもありません。かはらやれんがのちらばつてゐる地面の上に持つて行つた、新聞紙をしいて野天で毎日勉強をしてゐました。

日がたつにしたがつて北の方へ、バラック校しやが出来ました。私たちは小おごりし

てよろこびました。

バラック校舎ができたなら、今より、もつと／＼勉強が出来ると思つたのも少しの間、五六年がはいつてしまひました。

其の時私たちはたゞぼんやりとして、其校舎を見つめてゐました。

大 震 火 災

本所區 綠尋常小學校

第四學年男

常 峰 虎 之 助 (十一才)

十一時五十八分に地震がゆりはじめて來た。僕はその時はおばあさんと、内のかいでねてゐる時であつた。きうに目をさまして見るとはりばこがおちるし、だん／＼ひどくなつて來て、今にもたんすがころがつて來そうであつた。そうした時僕はにかからおりる時、足をふみはづして、にかいからおつこちた、時はいたいとは思はなかつた。それから外へ出る時がらすが足へ入つて血がうんと出た。地震でおどろいたからしいとは思はなかつた。皆の顔を見ると眞青でした。僕のおかあさんがおばあさんがゐないといつた。僕はなほおどろいた。龜ちゃんがおぶつて來てやるといつてゆ

れてる所をはいつて行つてにかいへ上つて、おばあさんをおぶつて來ました。その時はもうおばあさんははんにちにでした。それで地面でぬれるといけないから戸をしいてふとんをしいておがんでゐると、富川町の方面から火事がおこつて、又こんどは區役所が火事になつたから、山口へ逃げて行つて、すしおばあさんをねかしてかんばんやうしてゐる内に、かごやに火がついたから堅川橋へ來た。大きな船がもえてゐて堅川橋の一番かんじんな所へ火がついたから橋がたふれて、すごい音がした。それで富川町へ出た。後を見ると五六間あどへ火が來ました。富川町の通りはもう音が先にいつてしまつて、すいぶんゆつくりいかれた。

それから又人が大せい來た、めに、僕をかあいがつてゐるお母さんと、おばあさんが見えなくなつてしまつた。僕は人にもみちらされてかんばんの下になつてしまつて、泣いてゐるとき一番上の兄さんが、おこしてくれた。それでこんどはお母さんとおばあさんがゐないので、さがしてゐる内に火はだん／＼近くなつて來るから、自分の命があぶなくなつたから、逃げて行つて新大橋を渡つて、向ふへ行くど横の方から、火がぼ／＼／＼やつて來たので、あつくてたまらなくなつた。後へ入つたら大きなれんが／＼飛んで來て僕の兄さんのかたへぶつかつた、それもかまはずに水の中へ入つてゐ

た。それからどん／＼行くど家のつぶれた所をのつて行くと、大きな川があつたからそれをわたることが出来ないと思つて、横を見ると向ふ岸まで船がならんでゐたから幸にその船に乗つて、向ふ岸へ行つた。もうちよつとおくれると、その船がいごいてしまふ所であつた。それでまるたをわたつて五町ぐらゐいくと橋があつた。それを渡る時に向ふを見ると、三越から火がふき出してゐました。僕は月嶋で休んでゐると四方八方もえて来たのもう逃げる所がないから、こゝて死のうと思つてゐたら、幸にこなくなつて助つたが、内物一家無事だといふと思つた。永代橋をわたらふと思つてゐたら橋がおちてしまつてゆけないから、兩國橋へ来て水を見ると、死人がいつぱいでした。それで内のやけあへ来てとたんのきたないごじきごやみたいの内をたてゝ、二日その中へねました。

米川さん

本所區 綠尋常小學校

第四學年女

村井福子 (十二才)

尾崎さんや井上さんや小杉さんなどもすきでしたが、米川さんは大すきでした。い

つも學校へ行く時は、むかへていつしよにゆく。私は米川さんさけんくわをしたことがない、いつもたのしく仲よく暮してゐた。米川さんはこの震災で被服廠でなくなつたか、それとも生きていらつしやるかと、私は始終考へてゐた。とき／＼夢にもみる人のいふことには夢に見る人は皆死んでゐるといふが、馬場先生の夢をみたことがある。馬場先生は生きていらつしやる。だから米川さんは生きてゐると思つてゐるが、お隣のまあちやんや、さだちやんの夢を見ることがある、まあちやんや、さだちやんは死んでゐる。

五日の朝お隣りで、お人形の着物を作つてゐると、あいたかつた米川さんがいらつしやつた。いろ／＼お話をきくと、米川さんは被服廠でたすかつたのだつた。私はこう米川さんにきいた『あなたごつかけがした』ときいたら『ええ』とおしやつて『足とももと、せなかと』といつた。米川さんのおぢさんは十二月二十五日に病氣でなくなつたんだそうです。米川さんが、山本さんの家へ行かうといつたのでいつた、山本さんと米川さんと、私と三人でぶら／＼、方々をまはつたやがておばさんが『もうかへりませう』といつて歸らふとしたので、私は米川さんに學校でいたゞいた餘つた本をあげた。米川さんは私のこと『これでさいごのお別れよ』といつた。私は『どうして

ときいたら『私はお父さんがなくなつたから元の所へ家をつくれぬ。あなかの家でせわをしていたゞくのだから、もう緑小學校へあがらないで、あなかの學校へはいつてもう一度四年をやるの』といつて別れた。

火事でわかれた友だちのこころ

本所區 本横尋常小學校

第四學年男

金原重次

私はあのおそろしい地震の時、思ひがけなく革工場の中で、私の組の井口さんにあひました。その時は、何だかしたわしくなつて二人でさんざん泣いてゐました。すると井口さんのおばさんが、早くおいでと云つたので、そこで二人はわかれてしまひました。それから今でも、あのことを思ひだしては、井口さんは死んだのではないかと思つてゐますので、つい先だつてゆめを見ました。私が本を買いに行く途中で、井口さんにあひました。井口さんの話すには、『今は私はこじきどうやうだ。』と云ひますから、それなら私の家へきてゐなさいと云つて、家のお母さんに聞くと、いと云ひましたから、その日から井口さんと仲よく遊ぶことになりました。私はまあうれい

と思つたら、目がさめました。何だ今のはゆめかと云つて、その日はつまらなくくらししました。どこかに井口さんは生きてゐるのだらうと、私は井口さんの事ばかり思つてゐます。

今の東京

本所區 本横尋常小學校

第四學年女

澤田きん子

地震前の東京とちがつて、今は實にあはれな東京になつてしまつた。しかしどんな東京でも元居た所だと思へば、又なつかしい。道を通る人々は、皆様子が變つて、どんなせいたくなりをしてゐた人でも、今は着物でも羽織でも木綿ぞろいである。男の人たちは元氣を出して働いてゐる。私ども、皆焼いてしまつて、やかん一つだけ残つてゐる。それはおとうさんが『どこへ行つてもものがかわくどこまる。』とおつしやつて、それへ水を一ぱい入れて持つて行つたのである。おとうさんは、これはきねんだとおつしやつて大事にしてゐる。東京もだん／＼よくなつてきた。この分では近い中に元の東京になるであらう。

たゞ一つ残つた観音様

本所區 外手尋常小學校

第四學年女

奥村 杉子 (十一歳)

小さい、うちのバラックが、できたばかりのことでした。私は毎朝早く起きて外へでますと、ごちちらを見てもまつかな焼野原の中に、たゞ一つ観音様の森が、うかんだやうに見えました。私は、其中に立つて居る、赤い五重のとうや、黒い屋根を見るたびに、焼けない前のことが、たまたまなくなつてききました。私が日曜だと云ふては遊びに行き、ゑん日だと云ふてはお詣りにいつた観音様は、昔のやうに立つてゐます。しかし其ほかは、みんな焼けてしまつたのです。私が上つて東京中を見おろした十二階も、今はまん中から折れて、今にもたをれそうに立つてゐます。お猿のしほりや活動寫真を見たり、虎や熊やかはいい鳥に食物をやつたりした花屋敷も、今はあとかたもないのです。其頃は、りつぱな家がたくさんならんで通りあるきのできないほどにぎやかであつた町も、今はたゞまつかに焼けたかはらや、れんぐわの、廣い／＼焼野原となつてしまつたのです。私はそのことをかかんがへると、きふになんだかかな

しいやうな氣がして、ちつとおにはに立つたまゝ、いつまでも／＼観音様の森を見つめて居ました。

あゝ、観音様はどうして焼けなかつたのでせう。こんなにみんな焼けてしまつて、私の家からさへ其森が見えるやうになつたのに。私は、このことを、時々お母さんに尋てみましたが、はつきり教へてくれませんでした。

しかし、私はなんだか観音様がありがたいやうな氣もします。もしあの時観音様の森が焼けたら、あの中ににげていたたくさんの人たちはどうなつた事でせう。それを思ふと、なんだか観音様のおかげのやうな氣もします。

今はもうバラックがたくさんできて、観音様の森も、見えなくなりました。しかし、私は毎朝庭にでるたびに、この時かかんがへたことを、いつでも思ひ出します。

東京市の復興

本所區 外手尋常小學校

第四學年男

正 瑞 正 春 (十二歳)

大正十二年の、九月一日の大震災のために、僕等はどんなにくるしい思ひになつた

事でせう。しかし、僕等はあの時なくなられた、たくさんの人々のことを思い、又あのりつばな東京市が焼野原となつてしまつた事を思へば、これからどんなことでもしなければなりません。アメリカのニューヨークには今から十五六年前に大地震があつて、町は大方こはれました。今から十五六年前といへば、まだあまり長い月日ではないのに今では前よりもかへつてりつばになつてゐるといふことです。これは僕等の一番いゝ手本です。今東京市は復興といふ言葉で包まれて居ます。どこまでも赤くついでゐた焼野原にも、今はバラツクのトタン屋根が、きら／＼と光つて居ます。町には朝早くから晩おそくまで、つちの音や、かんなの音がにぎやかにひびいてゐます。ちよつとお使ひに行かうと通りにでると、もうすぐ目の前に復興焼なんて書いた赤い旗がひるがへつています。復興せんべい、復興そば、復興軒などと、目につくものは皆復興といふ勇ましい字であります。そして其の字の下で働いてゐる人々は、いかにも生々とした、元氣のいゝ顔をして勇しく働いてゐます。小さい子供でさへ、復興といふ言葉を知らない者はありません。

しかし、此の間讀本の時間に、ニューヨークの所を習つた時、先生は、此の東京をほんとうに復興させて、前よりも、もつとりつばな東京にするのは、僕等の務である

と云はれました。

ほんとうにさうです。僕等が、本氣に勉強して、りつばな人となつて、この東京市を前よりもつと／＼りつばな東京として、なくなつた、たくさんの人たちをなぐさめ又、こんごの地震について同情してくれた、たくさんの人たちにお禮するのだ、と思へば僕は胸がおどります。

向島 附近

本所區 業平尋常小學校

第四學年男

馬場 信 男

僕ハ昨日ノ晩向島ノドテノ上ニ上ツテ見タ、向フカラハ乗合自動車コチラカラハ馬カヤ自轉車ナドガ、サモイソガシソウニ走ツテ行ク、隅田川ヲノゾケバ月ノ光デ金ノマリヲウカベタヤウニ光ツテキル。

其ノ向フニハ淺草觀音様ノ屋根ガチヨンポリ見エル。

ソノ少シ前ニハ五十塔ガ立ツテキル。

時々ハトガ羽ヲ廣ゲテ飛ンデ行ク。

又少シ向フニハ活動寫眞ナドノ電氣ガキラ〜ト光ヲサシテキル。
 ソノ晩ハ八時半頃ニネタ。
 幾時間カスギタアトデフト目ガサメタ。
 時計ヲ見タラチヨウド二時頃デアツタ。
 何ダカ隅田川ノ方デサビシイ音ガスルノデ耳ヲスマシテ聞イテキタ。
 スルトスコシタツテカラ氣ガ附イタ。
 一ツハ觀音様ノカネガ『ゴーン〜』ト二時ノ合圖ヲシテキタノデアル。
 モウ一ツハ隅田川ニ走ツテキル汽船ノ音ガ『ポツポ〜』ト煙ヲハイテイクノデアツ
 タ。
 僕ハアンマリサビシイノデ、フトンノ中ニモグツテ又ネムツテシマツタ。

大地震

本所區 業平尋常小學校

第四學年女 須 嶋 靜

去年九月一日の大地震は世にも恐ろしい天災でした。私は地球がはれつして、此世

界がどうにかなつてしまふのかと思ひました。瓦はとび、家はつぶれ、煙突はおれれ
 んがべいなぞはくづれる、家をにげだしてそれにけつまづいてころんだりする人も、
 多くありました。空を見れば、空は一面に眞黒になつて實に恐しい、なんとも言へな
 い有様でした。見る／＼うちに火の手が我が家の方へ近かづいて來ましたから、お父
 うさんやお母あさんと野原の多い龜井戸の方へ、人の多い中を一しやうけんめいに、
 にげて行きました。そうしてその夜は親類へ避難しましたが、又大地震がありはしな
 いかと思つて眠ることも出來ませんでした。日本第一の大都會であつた大東京も一晚
 のうちに焼野原となつてしまひました。橋といふ橋は皆落ち、ままに西洋館のからつ
 ぽなのや機械の焼たのや自動車の半焼なのが有るばかりです。夜になつても、晝の様
 なあかるさであつた市中も電氣一つない暗やみいつになつたら、元のやうな東京にな
 るだらうかと思つて居りましたが、半年もたゝないうちに、小さいながらも家はたち
 自動車や電車も通るにぎやかな町となりました。この分で行けば數年の後には元より
 もつと／＼りつぱな東京になるでせう。

大地震

本所區

四四一

本所區 小梅尋常小學校

第四學年男 赤井 謹一

九月一日は、からりと晴れた空に日がさしてゐた。學校には庭があつた。いつもの様に學校へでかけた。まさかあのおそろしい震災が、來るとはゆめにも思はなかつた。時計を見ると十二時にちかゝつた。ぼくが事務所へ行かうとすると、足先がぐらぐらする地震だなど外へとび出した。すると、もう上、下、縦、横、にゆれたのでたまらない。近所にあつた家は、もうめちや／＼にたはれてしまつた。どてに上つて見ればあちらこちらに助けをよぶ聲がきこえる。淺草方面はまだ火はきてゐなかつたが、唯十二階が眞二つに折れて、その中から火をふき出してゐた。それを始めとぼつ／＼と火が出て、終ひに僕の近くにも來た。出ない足をひきずり／＼して、小荷物をかたにしよひ寺島まで逃げて、やつと安心したが、唯一つのこしたことがある。それはお父さんだ。今頃は火にやかれて居ないかしら、又けむりにまかれてはしないかしらと、心配でたまらなかつた、それから書生も心配だ。其の夜の空は眞赤であつた。おかあさんは野天にふとんをしき、かやをつり僕等に安心してねられる様にして下さつたのであらうが、とてもねむれない。天を見てはおとうさんもあの火とけむりでしんだの

かもしれない。きつとあのおそろしいもう火といつしよに天へのぼつたかもしれないと考へるとなみだがでてきた。そして夜中頃ふと目をさまして見ると、一人よけいにねてゐた。よく見るとぼくがさつきから心配してゐたお父さんであつた。それから書生が歸つてくれた。こんどは、うちのことが心配になつたので、お父さんにきくと『もうやけた』と一言いつてなみだを落された。ぼくはその時は此れからどうして行くのかと心配でたまらなかつた。次の朝焼跡へ行かうとすると、どこを見てもやけばいばかりであつた。うちの焼跡につくとなさけない、なんにもなくて、かれ木がしほ／＼と涙をながしてゐた。灰の中から金物をほりだして見ると、みなとろけてゐた。ぼくは四方を見ては、なみだがでてたまらなかつた。

焼け死んだうさぎ

本所區 小梅尋常小學校

第四學年女 菅野 ヤオ

前の細井さんの家でうさぎ屋を始めました。私は學校から歸ると、すぐ行つてうさぎのかはいい／＼姿を見るのを何よりのしみにしてゐました。二三日つゞけて見に

いつたが見れば見る程、美しくてかはいいのでどうかして、うちへもかつて置きたくなりました。それでお父さんや、お母さんにたのみましたらまだ生れて間もない小うさぎを買つて下さいました。目はルビーのやうに赤くて、まんまるでからだは綿のやうに真白な小さい小さい子うさぎでした。すむ家がないので、さどへあづけて置きました。その中に出来上つたので、引とりました大きなお家にたつたひとり、さんだりはねたりしてゐましたが、何んだかさびしさうなので、お相手にとごましほのをもつて来ました。そうして二ひきは毎日仲よく遊んでゐました。

あのおそろしい地震の時、私はこうしにつかまつてうさぎを見ました。もうよほど大きくなつたうさぎは、さもおそろしうにだき合つてちよつともうごきませんでした。私は大そうかはいさうに思ひました。

まもなく近くに火事がおこりましたので、お母さんと逃げながらも、うさぎはごんなにくるしんでゐるかしら、どうしてゐるかしらと思ひながら、寺島へ逃げました。うちがやけたので、うさぎはだれにもたすけられず、かわいさうに焼け死にました。そのとうちはゆめまで見ました。思ふとかはいさうです。お母さんは『死んだものは仕方がないからおあきらめなさい』となくさめられますが、どうしてもあきらめられ

ません。

あのかはいい、うさぎのお骨はどこをさがしてもありませんでした。

大地震

本所區 柳元尋常小學校

第四學年男

坂井金太郎 (十一才)

裏の家で遊んでゐたのは、去年の九月一日の正午少し前であつた。

ぐらぐら、ぐらぐら。家が今にも倒れさうだ。驚きの眼で外に出た。地震は益々はげしい。急にお母さんの事を思ひ出して、我が家には入つた。そしてさげんだ『お母さん、お母さんがはしないか』。其の時床が破れ、座敷はまるですりばちのやうになつてしまつた。僕はすべつてころんだ。頭の上へ卵がべしやりと落ちて來た。僕の着物は卵だらけのみにくさとなつた。

ゆれかへしはしないだらうか、ゆれかへしを心配して電車通りに出た。さうするどけが人を連れて來る。荷物を運んで來る人が後から青い顔をしてやつて來る。廣い電車通も忽ち人の黒山となつて、一寸のすきまもないやうになつた。僕は天を見たがこわ

いかに黒煙でいっぱいであつた。風はだん／＼とはげしくなつて來た。僕は天をじつと見とめてゐる。おりしも、僕の目の前へトタン板がび／＼と音をたて、落ちた。『あッーあぶない』とさげんだ時、僕の顔へなま暖い風があたつた。と思ふと後の家から眞黒い煙がうすをまいて來た。『そらたいへんだだ早くにげろ。』と西を見れば、今盛にもえてゐるが、東はまだ火は來ないから、東へ東へとにげて行く。その有様はまるで黒い水が龜戸の方へ流れて行くやうであつた。僕はそれから、お父さんと知つてゐる人の所へ行つた。さうするとその家の人は誠に親切で、裏の原へござをひいて休ませてくれた。僕等はその人々にお禮を言つて、一夜を明かした。

九月一日の震災

本所區 柳元尋常小學校

第四學年女

田 中 芳 子 (十三才)

東京市の人は、皆あのおそろしい大震災火災を、きねんにしなくてはならない。あの樂しかつた夏休みも終つて、又一心にまなぶ日、それは初秋の九月一日であつた。私は學校からかへつて、家で日記をつけ始めた、と同時にごうといふものすごいぢなり

とともに家ははげしくゆれた。父は太平町に、母は前の家へ行つて居た。私は此のまゝではあぶないと考へて、はだしで外へとびだして、二人で横の空地に居つた。母も私も父をしんぱいした。幸ひに父がかへつたのでおたがひにぶじの身をよるこんだ。私は三人そろつたので、やつと安心した。はじめてあたりを見まわすと、向には家の下になつて苦しんでゐる人や、かはらにあたつてきづを負つた人や、子供をなくした人や、親をなくした人々が、狂人のやうになきかなしんでゐる。家はどこの家でもつぶれたり、たほれたりしてゐる。その内に又ゆりかへしがきたので、母につかまつて、やんだと思つてゐる中に『芳子、あそこは火事ではないか』と父がといふので父の指さす方をながむれば、煙がもうもうとまき上つてゐる。まもなく西といはず南といはず、立上り、空はまつたく煙におほはれた。母が『にげませう』といふので、さつそく荷ごしらひを始めた。色々な物をしばつたけれども大せつな書物を出さなかつたのは、くやしい。私の大すきなかわいい小鬼の白は、あわてたので、ださなかつたのはくやしい。二三日後私の家が焼け跡にたつた時、私はあはれな白のしがいを見て涙ぐんだ。

大 震 災

本所區 三笠尋常小學校

第四學年男 山 田 正 一

私は内の前のたばこやで、十二しあわせをしてあそんでゐました。そのうちにおひるになつたからごはんをたべようと思いました。『地震だ』とおどろいて外へとびだしますと、屋根からかわらがおちる。見るまに向ふの家がつぶれました。あたりはまるでごろけむりが一ぱいで、大せいの人がわい／＼言つてゐました。やうやくしづまつたと思ふと、火事だといふこゑがします。大へんだ／＼と思つて見てゐると、だんだんうちの方へもえてきました。うちでは車に物をつんで電車通りにおいて、私とおつかさんとばんをしてゐました。それから、まだわすれものがあるのでおとうさんが、とりにいきますと、もう火でうちへはいれませぬのもどつてきました。もういよいよだめだといつて車を引いて、ひふくしやうへはいりました。ひふくしやうは廣いからいつても大じやうぶだといふのでした。そのうちにまはりがだんだんもえて来て、つむじ風がおこりました。その時におとうさんが『下

をはへ』といひますから私は下をはつて、おだいもくをとなへてゐました。さうするとかせがやんだやうですから、空をちよつと見ると一面にまつくろになつて、とたんや大きな火の子がさかんにとんできます。まるでいきた心もちはありませんでした。おとうさんは、私をかばひながら何か何かと手でさがして見たらふとんの上じきのやうなものがありました。それをかぶつて、む中になつてゐました。そのうちに風もやんだし、すつかりもえきつてしまつて大へんしづかになりました。さうしてさむくなりましたから、火のそばへいつて着物をかはおかしてゐました。すると人が来て『こつちへいらつしやい』といひましたから、あとをついていきますと、安田の池を通りこして兩國へ出ました。やけのこつたそうこがありました。そこへつれられました。氷やぶだうしゆや、いろいろくれました。私はそれでやうやく生きた心持がしました。

震災ご私の内

本所區 三笠尋常小學校

第四學年女 羽 島 美 音 子

私の内はやけないまへは菊川町にありました。おばあさんは西町の家におりました。

そしておしんの時私はお友だちの内へ、あそびにいつてゐました。お母さんは、かめざわ町の家にてつだいにいつてゐて、内には一番大きい兄さんと私のすぐ上のおねえさんがゐました。かめざわ町の家ではおばさんがまだ、あかちやんをうんだばかりであとはおぢさんと五つになる女の子だけです。内のお母さんはしかたないのであかちやんをだいてすぐにをばさんとひふくしようへはいました。私はお友だちの内におしんなのです。すぐれたをもつてうちへと、いそいでくると、もう内のよこちやうはやけてゐるので、ほんとうにおどろきました。そして私は菊川橋にまごつてゐますと、私の内はやけないかとしんばいしてみに来たわかひしゆが、私をお母さんのところへつれていつて下さいましたので、私はお母さんと皆なでひふくじやうの中へ行くしみました。内の兄さんとねえさんは、二人で着物をすし出してにげました。がど中でをばさんはまたよたよたして。どうしても兄さんやねえさんよりおそくなるのでせんどさんがそれを見て『年よりはあぶないから舟へおのんなさい』といつて舟へおせしてくれました。さうして兄さんもねえさんも、その舟へのらうとしたら、もう舟はうごきだしたので、のることができません。せんどさんは『この舟が今ぐぐぐしたらやけてしまふからさきへいつてのせてやる』といつたので、兄さんとねえさんは、し

かたなくて大島の方へにげていきました。それから二人は、しんるいのをじさんに出あつて皆で又方々をにげあるきました。一人舟でにげたおばあさんは、どこへおいでになつたでせう今もみえませんが、百ヶ日のくやうもやつてしまひました。私はおばあさんのことを思ふと大そうかなしくなります。今いきてゐれば、どんなにうれしいこととせう。たのしみにして、おばあさんとお話をして遊ぶのでした。私はおばあさんが大すぎでした。おばあさんは大そう私をかはいがつて下さいました。さうしていつもおゆはんのあとで、おもしろいお話をして下さつたり、よそへおいでになつたとききつとおみやげを買つて来て下さいました。そのおみやげもみんなやけてなくなつてしまひました。私はおしんの時、菊川町にまごつてゐたら死んでしまつたかも知れませんが、そのわかひしゆがきて、ひふくしようにつれていつてくれたので、たすかつたのです。お母さんが、私がつたのはふしぎだといひます。

初 雪

本所區 菊川尋常小學校

第四學年男

菊 地 理 一

今朝早く目をさまし、戸をあけて表を見ると、通りも屋根もまつ白でどこをみても銀世界です。まだわたのやうな雪が、ぼた／＼ふつてゐる。屋根や道や材木などはわたをのせてのりではりつけたやうにおちない。僕は長くつをはいて雪の中を走つてゆくと友だちが、雪合戦をしてゐるので、僕も入れてもらつてしたが足や顔にあたるごいたいからにげる。そこを雪をまどめてなげる。すいぶんおもしろかつた。僕は糸と炭をもつて来て、雪つりをしたがつれると落ちてなかく／＼取れない。家の前へ来て雪達磨をこしらへてあそんだ。犬は大喜びではねまわる。翌日になると達磨はとけてしまつた。

火事と大地震

本所區 菊川尋常小學校

第四學年

高 木

康

ちやうどお晝ごろ、がたがたはじまつてきました。小さい地震かと思つてゐましたら、まるで船にでもものつてゐるやうです。一度やんだので外へどび出ました。又ゆる／＼ゆり出たので三の橋までこえをたてなきながら行きました。今では笑つてゐます

が、その時はむちうでした。橋のたもとで拜んでゐると、先生方がいらつしやつた。中でも泥先生はきすだらけの人をおぶつてゐらつしやつた。そのうち方々うからまつ黒いけむりがもう／＼とたちのぼつて來ました。逸見先生に『學校はどうでせう』とお聞きすると『學校はもうだめでせう』と言はれた。その時の心持ちはなつかしいやうなかなしいやうな言ふに言はれない感じがしました。にはかに花町の方の火が來て、ほほがいたいやうになつて來ました人々が『もうだめだ／＼』と言ふこゑにしたがつて、ぞろ／＼にげてゆきます。私も龜戸のほうへにげました。とちう、ざいもくがたふれてゐて、その上をはいのぼつてゆきました。やうやく龜戸の家へついた。ゆふかたおながすいて來ましたのでうらでごはんをいたゞいてゐるとこんどは風がかはつて龜戸のほうへ火が來ました。こんど夜どうしあるいて、いちかはまで行きました。ついた時は夜の一時ごろでした。汽車へのつても火事の話をしてゐると、となりへいつてもどこへいつても、その話をしてゐます。十一月なのにしろじをきてゐるいてゐます。橋の上になにかのこつてゐるかと思ひましたら、車の金わと、たんすのかんだけでした。

大地震と火事の話

本所區 太平尋常小學校

第四學年男

夏見

信次

(十二才)

九月一日大地震の時は随分おどろきました。私はうちにゐなかつたのでよかつた。うちにゐたらきつとけがをしたかわからない。私はちやうどあの時お湯屋にゐたので、このお湯屋はできたばかりだったので、つぶれませんでした。私はすぐうちへかへつたら、うちのすぐうらから火事が出た、それが悪日だからごんごんもえて来てけむくて、たまらないので栗原橋へにげた。途中の人ごみで、お父さんやお母さんにはぐれたので、ごうしやうかと思つたが仕方がないので、栗原橋をわつて龜戸の天神様へにげて行つた。夕方になつてなんだか腰の中で、ぐうぐうなるからふと氣がつくとまだひるからごはんをたべない。それでもがまんをしてゐた。そのうちにおぢさんと妹にあつたので安心した。翌二日におぢさんと二人で、方々にはりふだをしてゐた。それがうまくお父さんとお母さんにみつかつたので、むきにやつて来て私共とあつた。その時のうれしかつた事はとても口ではいへない。それから私共はいなかへ

行つた。田舎はけしきがよくてしづかではんどうによいと思つた。今もこの家のやけた跡へバラツクを建て、お父さんもお母さんも妹も一所に、たのしくくらしてゐる。朝晩は寒い風が吹きこんでくるが、それでも元氣で毎日學校へかよつてゐる。

大 震 災

深川區 深川尋常小學校

第四學年男

小 船

清

思ひもよらぬ大震災に會つた。

流石の東京もめちゃくちゃになつてしまつた。焼死者も何万人と出した。

九月一日僕は學校の始業式をすまして、家へ歸つて夏休みの宿題を見てゐると、うなりを立て、がたん、と急に動いたかと思ふと、がたん、ぐら、と大地震だ。僕は『地震だつ』と叫んでふとんをかぶつた。

やんだ時、姉さんは泣きながら走つて来て『あゝつぶれなかつたの電車通りは澤山つぶれて大へんよ、お父さんはどうしたらうね』と青くなつて言つた。時々ゆれ返しが来てあぶない。

家は曲つてしまつて、方々からお日様の光りがさしこんで来る。間もなく、向ふが火事だ、こつちも火事だ、津波が来ると大さわぎ。

家の下で死んだ人や手足をくぢいた人が、血をたらしながら大勢通つて大へんだ。お父さんも無事で歸へつて来て、荷をこしらへ始めたが、火事が近くなつて火の子がばら／＼来るので、高瀬さんに連れられ妹をせおつてにげた。曲つた家でも、もう焼れると思ふと何となく行くのがおしいやうな氣がした。人々におされながら行くと『向ふから火が出た』あちらへ行かう『あつ火が出た』あちらへ行つたり、こちらへ来たり火に追かけられながらやう／＼高橋の上へ来た。橋の上は人で一ぱいで動きも何も出ず、おされて歩いて居た。妹も苦しいから『ごめんない、ごめんない』と言つて居る。

やう／＼に岩崎さんの別荘に、にげこむと息つく間もなく別荘にも火がつき、別荘の廻りの家も火事になつて、おまけに風が強くなり、火の子が雨のやうに來て暑くて暑くてたまらない。

皆『なむみやうほうれんげきよ』なむあみだぶつ』と叫ぶ聲で、耳がさけるかと思ふばかりだ。高瀬さんが『行くよ』と言つたのが皆の叫びで消されて聞えなかつたので

何所へ行つたか、居なかつた、仕方なくそばにあつた、むしろをかぶつて池の中へ入つた。其の時池の中には大勢入つて居た。水でしたしながらまつて居るさやう／＼下火になつたので『お父さん高瀬さん』とよんで歩いた。伊勢屋の叔父さんと會つた。叔父さんはお父さんの居る所へ、連れて行つてくれた。お父さんと會つて喜んで居た時に高瀬さんも生きて居たと言つた。池の水を飲みながら、うつらうつらねた、夜が明けてからお父さんは、お母さんや姉さんを越中島へ見つけに行つた。僕は岩崎さんの別荘の中を『小船さく、小船好子』とよんで歩いたが何の返事もなかつた。

お父さんも居なかつたと言つて来て、『田舎へ一度行かう』と四人で出かけた。お日様は眞赤で空は眞黒だ。

遠くはまだ眞赤にもえて居た、道は焼電車や、針金や、かわらや、とたんであぶないお腹がすいて、ひよろ／＼歩いて行つたが、すぐたびれて仕方がない。高橋の上で眞黒になつて死んだ者を見ると、氣の毒で恐わい。しかし、くさくて氣持が悪い。その恐わい中をだん／＼歩いて行くと本所のひふくしやうのそばに來た。ひふくしやうの中には大人も子供も、皆だき合つて苦しそうに澤山眞黒になつて死んで居た。どぶの中も電車通りにも死人が澤山居た。實にくさいが氣の毒だ。お父さんは子供をせ

おつて死んでゐる人はお母さんに正夫かと、いちいち見てゐた。途中で在郷軍人に寺島學校でむすびをくれると話を聞いて、吾妻橋の脇へ来て又在郷軍人に『寺島學校は何所ですか』と聞くと『あゝ寺島學校ですか、まだ遠いのです、では僕のをあげやう』と妹とお父さんに二つゝつくれた、まだ四つむすびがあるので、お父さんは『まだ二人居りますと、強いお父さんも泣顔して願つた、すると、となりに居た在郷軍人が、『君皆やつてしまひ給へ、かわいさうだよ』と言つたので『さうだ皆あげるから持つて行き給へ』と言つたので喜んで貰ひ、禮を言つて皆二人で食べてしまつた。少し元氣づいて水を飲みながら、お父さんの友人の家へ行つて僕と妹は世話になつて居て、お父さんと高瀬さんはお母さんや姉さんを見つけに行つた。千住では〇〇〇が火をつけて廻ると言ふの下夜もねずの番をして、在郷軍人、青年團が刀を持つて歩いて、數度聲をかけても返事をしないと、切りころすと言ふので大さわぎだ。僕は何に付けてもお母さんはどしてゐるだらう、姉さんや弟も腹がすいて困つて居るだらうと思つて心配だ。

お父さんたちも間違へられて、ころされやしないかと心配して居たが、皆揃つて來た時は『あゝお母さん、姉さん、正夫。』と笑ひながら、うれしくて泣いてしまつた。

翌日汽車で田舎へ歸つた。十里の道を一日もかゝつて汽車の屋根の上に居て、恐ろしい思ひをして、やう／＼田舎の家へ着いた時には、つかれが出て助つたゆめなど見て一日ね通した。

あゝ九月一日には恐ろしい大震災に會つた。思ひ出せば身震する如くだ。實に恐ろしい。

思ひ出

深川區 深川尋常小學校

第四學年女

赤堀 杉子

金澤さんと長谷川さんと私と三人で、おはじきをしてゐますと、ゴトと、言ふ地鳴がしたと思ふと間もなく、大地はがた／＼とゆれ始めました。私は『地震だ！』と叫んだら金澤さんの兄さんが『此所へいらつしやーい。』と言つたので金澤さんや長谷川さんや私は兄さんにかじりつきました。その中地震がやんだので私はむがむ中で我家をさしてかけだしました。又途中でいやな地震にぶつかりました。私はそばの電信柱につかまつて泣いて居ました。すると向ふの方から、お父さんが、てる子をおぶつて眞

青になつて飛んで來ました。私は『お父さん。』と言ふと、もう後はなんとも言へませんでした。家へつくと家は瓦一つ落ちてゐませんでした。やれ／＼安心と思ふと、左右田銀行から出た火が、菊見せんべいまで焼けて來ましたので、私たちは皆にげました船でのえへ行つた時、青年團のたきだしの玄米のおむすびをいたゞいた時一番うれしゆうございました。

バラツクの様子を知らせる手紙

深川區 東川尋常小學校

第四學年

淺井

豊

此の間はおみやげを下さいますてありがどうございました。伯母さんがお出になつた時には家はだいなしでございましたが、お出になつた二三日

後には大工が來てとだなやはしごだんなどをこしらへましたからうちはかたづきました水道もしけました。お店も品がたくさん入つて、此の頃ではだいぶ賣行がよろしゆうございます。お父さんもお店のことのでいそがしうございます。又暖たかになりましたら啓ちやんをつれて、せしお遊そびにおいで下さい。さようなら

二月十七日

豊より

伯母上様へ

バラツク

深川區 東川尋常小學校

第四學年女

荒井マサ子

私はやけ出されてからバラツクにすむやうになつたが始めてバラツクと言ふ物にすんで見ると屋根やゑんの下から寒い風がはいるので、さむくつてゐられないのです。そしてこのごろは、さむさが一そう強くなつて、身にしみるやうになつたから、うちではすき間に木をはつてくれました。

私は暖い家にすまつてゐるいと子のふじ子さんやしづえさんが、たまらなくうらやましいのです。
けれどもまだ田舎にひなんして東京へかへる事の出来ない人が、たくさんあるので、私はそうゆう人とくらべると、まだくこうふくだ。
すこしぐらひはさむくても、がまんしていつしようにけんめに、べんきうしようと思つてゐるのです。

そして田舎にゐて東京へかへる事が出来ないで、さびしくくらししてゐる人を早くかへる事の出来るやうに、神様におねがひいたしませう。

僕等の教室

深川區 明治尋常小學校

第四學年男

山田 甲之助

僕は七月七日始めて元のなつかしい、明治學校へかへつて來ました。見れば、トタン屋根のバラックで、昔のやうな立派な校舎の面影は、何處にも残つてゐないが、元の先生や古いお友達がゐるので、何となく居心地がよい。僕等の教室は、第二棟の東

の端で、元の運動場である。ごこの教室も板で仕切がしてある。室はあちらにもこちらにも紙で目張がしてある。南と北に窓が二つ、つあつて紙の破目から冷い風がたえず入つて來る。正面には小黒板が五枚ならべてかけてあつて、冬の淡い太陽の光がこの上に照つてゐる。床の上に敷つめたアンペラやむしろやござの上に、大阪から寄贈されたといふ机が三十個ばかりと、先生方が汗を流して作つて下さつたといふ、四人ならびの細長い机が十個ばかり、その前方にならんでゐる。僕は不幸にもこの細長い机の端へ坐ることゝなつたのである。寒い日には床下から冷い風が、むしろををして吹いて來る。そんな時には、天井の張紙まで、窓のすきまから吹いて來る風に、バラ／＼と騒々しい音をたてゝ鳴る。室の隅にはストーブが冷く凍えてゐる。ストーブといえは元の校舎で毎朝、まつ赤になつたストーブの周圍に陣取つて皆などたのしく語り合つた時のことを思ひ出す。しかし、今は煙突がないので、その上、すゝがたくさん飛んで困る。板一枚でへだたり合つた教室では、お隣でやつてゐることは、何でもすぐわかる。本を讀んでゐても、お話をしてゐても、今誰が何をやつてゐるか、すぐわかる。しかし、唱歌の時間には、大聲で歌をうたふから、こちらでどんな面白いお話をしてゐても少しも聞えない。又時たま先生のお出が遅いことがあると、教室

では皆がわい／＼騒ぐ。するとお隣の教室から、松山先生が、黒板の上へにゆつと恐い顔を出される。

『そんなにさわぐのは誰だ』

先生の大きな聲を聞いて、皆な急にをとなしくだまつてしまふ。

この狭い教室へ六十七人が、すしづめになつて入つてゐるのであるから、きゆうくつなことがつたらない。

あゝ僕等は何時になつたら、一年や六五年のやうに、あんな新らしい立派な校舎へ入ることができのだらう。

大 震 災

深川区 明治尋常小學校

第四學年男

吉 田 榮 一

御飯をいただくかと思つてはしを持つた。すぐ、ぐら／＼と来た地震に僕はおせんの下へかくれた。と間もなく又大きな地震が来た。家は小船に乗つたよりもまだゆれる、そのために、たな、かべは皆なおちて、障子、からかみは真中からおれて倒れて

しまつた。外ではがら／＼／＼と家と家の倒れる音、『皆んな出たか、』と言ふ者もあるし『お母あさん、お父さん』などと叫んで泣き呼ぶ子供もある。

僕は『もうだめだ』とかくごそきめた、するといいあんばいに地震はやんだ。外へ出た。やつと安心したら、一人の人が『あつちの火事は大川向でこつちのは洲崎だと言つてかけて来た。僕はふるへ上つて、御飯をくれると言つたが食べられない。』

清澄遊園へ逃げた時は、もう日の暮方だつた。夜はすぐそばまで、火が来て、火の粉がたくさんどんで来た。それをやつでの葉でばたばたはたいて火の粉をけした。その時はするぶんくるしかつた。

翌日 我が家に来て見たらまだかはらの上から火が出てゐた、かはらを取つたら店の道具がたくさん出て来た。あたりは焼けの原で、所々に土藏や木の焼けたのが立つてゐる。僕の家を見ると、なさけなくなつて知らぬまに涙が出た。いくらかの道具をひろつて歸つた。

毎日げん米を食べさせられたのと、〇〇〇でさわいだのは今考へるとぞうとする。

七日に板橋へ逃げて行つた途中、高橋と新大橋に死人がごろ／＼してゐたのは、見るからにきびがわるかつた。焼けない小石川や板橋へ来て、立派に家が立並んでゐる

のを見ること、ほんとうにうらやましかつた。
板橋の親類の家へ行つて白米を食べた時には、ほんとうにおいしくて、たくさん食べられた。

九月一日

深川區 東陽尋常小學校

第四學年男

角 張 年 季

あゝおそろしい大地震。僕は圖書館からの歸りで、八幡様の横を通りかゝつてゐた急にぐら／＼と天地がゆらぐと共に家はばた／＼とたふれ、ひめいの聲はあちらこちらから聞えて来る。電車道を一直線に仲の町まで来ると、お父さんがむかひにこられてゐた。そのうちに近所から火事が始まつた。あまり火の手がはげしくなつて来たので辨天原までいつた。

お父さんが區役所のごみ車をひつぱつて来たので、それにだした物をのつけた。ほつとして草の上へこしを下した。

二葉屋のをちさんが、アイスクリームをくれた。震災前に幾度も食べた事があるが、

これほどうまくはなかつた。夕方頃になると火の手はますます盛んになる。人々はごん／＼にげだして行く。

その人々のせなかには赤ん坊か、三つ四つ位の子をしょつてゐた。

もう夜だ。火の手一さう盛んになるばかりだ。僕等もそこにゐた、まらなくなつて海の近くまでにげた。火の子は雨の様に降つて来る。急につむじ風が起つて、僕の持つてゐたねえさんのかうもりが海の中へ吹飛ばされた。向ふの方からつなみだと言ふ聲がした。それをきいて生てゐるそらがなかつた。後でお母さんがおつしやつた。その時は僕もほんたうに死ぬのかと思つた。大正十二年九月一日はわすれがたい日だ。

九月一日の大震

深川區 東陽尋常小學校

第四學年女

和 田 チ エ

九月一日の地震、あゝなんといふ恐しい事だろう。私はあの時外で遊んでゐたら、急に角の洋食屋がたふれて、つづいてならびの家がみし／＼がら／＼とたふれた。私はびつくりして、いそいで呉服屋の家へはいつた。もしその家がたふれたら私の命はご

深川區

四六七

うであつただらう。呉服屋の人と裏口からぬけて泣きながら家へ歸つて見ると、お母さんたちはもし家の下になつて、苦しんでゐるのではないかと思つて、心配してゐらつしやつた。みんなで原つばへすはつて居ると、家の後の方から白いやうな黒いやうな煙が上つた。大方どこからか火事を出したのだらう。火はさかんにもえてゐるらしい、私はなんにもわすれて、たゞおたすけと神をいのるばかりだつた。いよ／＼あぶなくなつたので、姉さんと正ちやんと私は隣の人と一しよに、竹市工場へ行つて船に乗つて居たが、もう川の向へ火がつき出して盛に焼けてゐるので、船から上つて辨天原へ向つて進んで行つた。辨天原へ行くには、幅一尺程の假橋をおしあひながら渡つたりでこぼこした道をかけてあるいたりして、あぶない所が澤山あつた。午後の八時頃になつても火は益々ひどくなるばかりで、ちつとも下火になつて來ない。又あちらの方では火につままれた人々が、わあ／＼とさけんでゐる、その聲は實に悲しうで、なほ恐しさをますばかりである。其の晩はそこで野宿をして、夜のあけるのをまつた。やがて不安な一夜は明けて、皆々ほつとした。人々の顔には、つかれた色があり／＼と見えた、私等一同は母に連れられて砂村の家へ落つくことにした。

地震の夜

深川區 六間堀尋常小學校

第四學年男

黒田 初太郎

思ひ出してもぞつとするあの大きな地震、學校からかへつてくると、まもなくぐら／＼とやりだした。ほら地震だといつてゐるまに、家はどつとたほれた。

通へでると、黒山の人である。だん／＼あるいて月島へにげた。だん／＼くらくなりまはりには火に包まれてゐる、月島の相生橋の上には黒山の人である。

ぼくはかしたつぶちへとびでて、大きな帆前船にたすけられた。シートをかぶつて水をかけた。火はだん／＼に橋に近よつてくる。いよ／＼はしにひがついた。

人々は時のこえをあげてゐる。シートを上げてみると物すごい、それを見るときまるで『だいやが』舌をだしたやうだつた。だんだん夜はあけてきました。朝になると着物はびつしよりでした。ほてりでかはいてしまひました。船からおると、死人がみえた。ぼくは『ぞつとした』あの大きいじしんはまるでゆめのやうに思はれる。あんまりせいたくをしたから、天のいましめであらう。

地震の夜

深川區 六間堀尋常小學校

第四學年女 出野 壽美

九月一日に私は學校から歸つて來て、ごはんをたべておりますと、きゆうに地震がおこりましたので、私たちはすぐ電車通へ出ました。そして、すぐ皆んなで一しよに小石川へ、いつたが、いかれませんでした。

その時は、すでにおそくあたりは、もはや真くらに、なつて、おりました。たゞほのほが、ごんごんと、こちらに、さしてやつて來るのでありました。皆んなは、ただまご／＼するばかりでした。その時です。人ごみの中から、丸の内／＼丸の内が、一番あんせんだぞと、言ふこゑを、きゝますと、そこらにゐた人たちも、そうだ／＼と言つて、みんな、丸の内をむいて、ごん／＼といくので、ございました。私だちも、そのこゑを、きいて丸の内へ行くことになりました。そうして人々と一つしよに、丸の内のおほりのそばへ行くともうあつてたまりませんので、私たちは、いそいで、はしをわたつて、なかへはいると、大勢の人たちが、もうはいつて、おりましたので

しばふの上へ上つて、やれうれしやと、おもつて、空を見上げると、もう空は一面に赤い幕をひろげたやうに、真赤でありました。そうしてふと見るとお父さんがおりませんはつと思つてお母さんに、お父さんはとくとお母さんも、おどろいて、さつとかほの色が、かはりました。そうして、はら／＼と涙をこぼして、私たちは何んど、ふこうな、人げんでしやうと、言つたので私が色々なだめると、しかたがないと言つてあきらめたやうでした。その時は私も涙をこぼしました。空は、いよ／＼真赤になつてまいります。

大地震

深川區 扇橋尋常小學校

第四學年男 館 林 喜一

そら地震だ、學校へにげろとおかみさんがいつた。すぐに學校へいつたらもう火の粉がとんできた。一尺ほどの丸太が火の粉と一しよにおちてくる。空を見ると紙のやうに見える。とたんが落ちると一間位のものだ、實におそろしい、まごまごしてゐるうちに暗くなつた。

『はやくにげよう』僕は『おかあさん砂町の方へにげようよ』といった。ぼくは我家をあきらめた。それで砂町の方へ出かけたら、後から後からおしてくる。僕はここで死ぬかと思つてゐたらやうやく砂町へ来た、ここで一ばん夜をあかさうと、おかあさんがいつた。ねむたいけれどもねむれない。夜が明けてからおかあさんとかめいごのときやうの所へきたら、かめいごのおばさんが『私の所へおいで』といったからみんなでいつてせわになりました。

九月一日

深川區 扇橋尋常小學校

第四學年女 早川 ごとく

九月一日は、それは／＼むしあつい氣持の悪い日でした。姉さんは御用があつてお晝にお出かけになりました。小さい兄さんと大きい兄さんと私と三人で、御飯をいたいて、お茶わんを洗つて居ると、急にがた／＼と言ふ音がして、たなの物が落るやらゆか板があがつたりさがつたり、みし／＼と恐しい音の中から地震だ、と言ふ聲が聞こへました。兄さんはあぶない早く外へ出る。と言つて居りますがもう柱がよこ

になつて居るので、だい所の戸につかまつてふるへて居ると、兄さんが私をかゝへてたなの下や、柱の下をくゞつて外へ出ました。向ふの原を見るともうたくさんの人が戸を敷いて、ひなんして居るので、三人は其所へ行つて少しの間じつとして空を見て居ると、すさきの方に眞黒な煙が、ぼう／＼と立上つて居ります、私はふと姉さんの事を思ひ出して、心配して居ると又ゆり返しが来たので、女の子や赤ちやんの泣き聲が方々から聞こへて来ました。私はあまり驚いたので、唯ふるぶるとふるへて、兄さんにだきついて居ました其所へ心配して居た姉さんがふるしき包を持つて、眞青になつてかけて来て、三人を見るとさも安心したやうに、兄さんとお隣の伯母様と小父様と、お話をして居ます。煙や火はひどく東町千田町と、なか／＼下火にもなりそうもないので、倒れかゝつた家へ入つて、大事な書附や、そこいらにかゝつて居た着物を五六枚持つて来ました。兄さんは工場が心配だからお前達は先へにげて行けど、おつしやつたので、近所の人といつしよに倒れた、家やかわらの上を通つたりして、工業學校の前へ来ました。其所にも大勢の人が居るので、此所は大丈夫だらうと言つて、入つて行きましたが、又こんども火の粉がぱらぱらと、とたん屋根に落ちてひどい音を立て、居ります。するとどこかであらつすぐ其所が火事だ、と言ふ聲がしてぼうば

うと言ふ音が聞こへます、又かと思つて支度をして中川の方へ向つて行くと、大きな川があつて、船が三隻で向ふがはへ人々を渡して居ります。私達はその船を無事に渡つて、又中川の方へどん／＼にげて行きました。みんなは心配しながら、ごてにのぼつて見ると、もう幾百人が居ました。あたりを見ると小さい兄さんが居ません、姉さんは方々がして居ると、お隣でも一同揃つてゐるし、會ふ人々皆揃つて居るのに私達一家は大きい兄さんと小さい兄さんが居ません。その中に夜中になつてしまひ、方々が明るくなつて來ました。ごこかで兄さんの話聲がするので、びつくりしてあたりを見ると大きい兄さんがぼうを持つて立つて、心配さうな顔ですぐそばの鐵工所の人と話をして居ります。私達はどんなに喜んだでせう。兄さんも私達の無事な顔を見て大へんに喜びました。小さい兄さんも二日の日にみづかりました。それからそれへと考へるとまるで恐しいゆめの様です。

悲しい／＼大東京

深川區 臨海尋常小學校

第四學年男

五木田正夫

(一)

東京中をおそひたる
りつばな家はみな焼けて
りつばな橋もやけおちて
ぼうけんおかして橋の上

猛火はしだいに進み行く
命をとつたつむじ風
猛火もやみし三日の日
行くはいづこのゐなからだらう

(二)

世界にはこりし大東京
悲しい姿となつたのは
あはれ焼野となつたのだ
わづかの米をもらふのに

地震のためにあのやうな
たつた一夜の出来事で
あゝ東京のひなんみんな
ざるやバケツをもつて行く

震災の思ひ出

深川區 臨海尋常小學校

第四學年女

鈴木ゆき

あゝ思ひ出せばおそろしい、あの時は死ぬか生きるか、わからない商船學校の石が

けに行つて、頭から水をかけられ、むかうは眞赤にやけてゐる。そして相生橋の方は『たすけてください』といふ聲がすると思ふと、あかんぼうの『おぎやあう』といふ聲やときの聲でたいへんな、その中にあつちでもぼちやん、こつちでもぼちやんといつて人が川の中におちるのをみてゐて、私たちはおそろしくて／＼たまらないと思ふとつく／＼あの人たちは、かはいさうだ、おいしいことおしたと、むねいつぱいになる。あの時にたすかつて生きのこつた私はゆめのやうで、そのときのことを目にちらつてゐて、わすれやうとしてもごうしてもわすれられない。

弟の死

深川區 元加賀尋常小學校

第四學年男

丹羽 倉二

おそろしい／＼、九月一日も、もう六ヶ月の後となつた。あゝあの時どうして弟は見えなかつたのだらう。お父さんがようやくさがしあてた時、弟は巡査にどこかへつられて、姿は見えなかつた。ただ血のついた學帽と草履がすててあつた。それも荷物と共に灰になつてしまつたのである。今残つてゐる弟の物は、僕が負つてにげたカ

バンと教科書がさびしく残つてゐるのである。僕は毎日バラツクの、小さい學校へ通つてゐる。震災前は弟と二人で、元氣よく歌を歌ひながら學校へ通つてゐたが、今は一人さびしく、他の友だちが弟たちといつしよに面白さうに行くのを、うらやましく思ひながら通ふのである。家へかへつても晩のごはんがすんだあとで、弟は學校で習つたじまんの京の五條のゆうぎをしたり。又歌など歌つたりして遊んだけれども、今は思ひ出のかなしい唱歌と、それからお父さんの心は、僕よりもつと／＼さびしいにちがひないと思ふ。僕は元氣を出さう。そして勉強しよう。僕はお父さんの力になつて弟の勞もはたらかうと心の中で思つた。

大地震ご大火事

深川區 元加賀尋常小學校

第四學年女

長繩 よし子

私は東京市深川區にすんでゐる子供です。昨年九月一日の、あの大地震大火事にあつて着物から洋服まで焼かれてしまい、着のみ着のまゝ、命から／＼逃げ出して、今は何もない様な有様です。

『まあ』そのお話は後にして、逃げる時のお話をいたしませう。皆様も御存じの通りあの大地震の爲に地は破れ、水を吹出して居ります。その恐ろしさは、たとへて言ふ言葉もありませぬ。

その中を私は自轉車に乗つて逃げました。まだあかるい中に逃げたのですが、遠い／＼四谷まで行かうといふのですから、暗くなつても中々つきません。その長い／＼道を歩いて、やう／＼ついたのが夜の八時三十分ごろでした。

あちらも地震のあとですから、ねる所はなし困つてしまひました。でも四谷の信ちやんは大急ぎで戸を持つて来て私たちをねせてくれました。それで夜は野宿ときめて、やうやく眠につきました。あくる日も／＼も南の空は煙で一ぱいです。又夜は一面がまつかでありまして、私はどうなる事かと知らず／＼涙がこぼれました。私たちの東京が一面に焼野原になつてしまふかと考へた時は、なさけなくなつてしまひました。でも三月四月とたつ中に、だん／＼と家が出来、お友だちもだん／＼ともどつて来るので、うれしく思ひます。せび早くもとよりもつとよい東京にしたいと思ひます。

大 東 京

深川区 數矢尋常小學校

第四學年男

柳 田 武 雄

思ひ出してもぞつとする、去年の九月一日午前十二時頃、にはかにおこる大地震、又つゞいておこる大火事で、大東京はめちやく／＼になつてしまつた。あすになれば、〇〇〇〇〇〇人さはぎである、ほんどにいきた心もちがなかつた。僕は四日目になかへいつた。しばらく滞在してゐた。丹生村をたつて、なつかしい東京さして歸つた。歸つて見れば、こわいかに上野のていしやばは、りつばに出来てゐた。外へ出て両側を見れば大そうりつばになつてゐる。なかには、しるこ、生そばなど書いた、のれんが下つてゐる。こんなになるとはゆめにも思はなかつた。ゐなからもつて来たカバンをやうなのをもつてゐるものは、少ないだらうと思つたら、僕よりも、もつと／＼りつばなのをもつてゐるのが、いくらもゐたので、じづにおどろいた。半年もた／＼ないのに、このやうにくわいふくしたのだから、これからの東京はせんよりも、もつともつとりつばな大東京に、なるだらう。それにつけても私たちは、一生けんめいになんきようしなければならぬ。

九月一日を思出して

深川區 數矢尋常小學校

第四學年女 池田 きみ

九月一日の大地震と大火事で、花の都といはれた東京も、焼野が原となつてしまひました。私のうちも午後三時頃焼けてしまひました。私はくやくして、くやくしてたまりません。この間被服廠へいつて、埋骨堂へお参りをしました。幾万の人がこゝで死んだかと思ふと、お氣の毒でなりません。併しこの人たちに、犬死にはさしたくはありません。それにはこの東京を前よりも、もつともつと立派なそしてどんな大震災でも人が死ぬやうな事は、決してないやうにしたいと思ひます。私が東京へ歸つて來てから、方々の國々からいろいろの物をいたゞきました。私も早くやれるやうな身分になりたうございます。

震災 後

深川區 八名川尋常小學校

第四學年男 片山 良雄

(一) 焼け跡學校なさない

テントはつて授業する

机はビールのあき箱で

こくばんポールでこしらへて

その上ぼくじうを塗りつける

かんたんこくばん出來ました

焼け跡學校なさない

(二) 本や鉛筆かばんまで

そつくり揃へてくれました

町内でははいきうものもたくさんに

その中世界のへれたものも

ありますよ本當に

ありがた涙が出て來ます

深川區

世界の人のおなさは

僕等が死ぬまでわすれません

(三) もう学校のばらつくも出来ました

僕等が大きくなつたなら

世界の國々に

御恩返しいたすのよ

(二) 今からうんと勉強し

りつばな人になりますよ

大地震

深川區 八名川尋常小學校

第四學年女 松本くめ

(一) 九月一日大地震

がた／＼みし／＼ゆれだした

家では母さん腰拔かし

妹、あー／＼なきだした

其の内兄さん歸りきて

火事だ／＼と大さわざ

(二)

兄さんごぞうと荷物もち

岩崎公園ににげました

あつくて／＼たまらない

お池の端にちぢまつて

火の粉をかぶつてくるしんだ

あけ方頃には火事やんだ

(三)

ほつと一息つくうちに

安心してゐる暇はない

姉さん赤ん坊産みまして

三日にお湯をつかわせた

焼けあごのおけいこ

深川區 川南尋常小學校

第四學年男

井上 豊久

ろ天のおけいこといふ、お話を先生からきいたので、さんだらばうしを支度して學校に行つた。ろ天は面白い、教場は廣いので氣持ちがよいが、日にてりつけられるのでたまらない。

女の子は手のぐひをかぶつて田舎の茶つみの様だ、すはつたりするのでおしりがいたい、先生は板にボール紙をはりつけて、黒板を持つて来る。

こつちに四年あつちに六年と、方々で一とかたまりになつてゐる。

焼けない學校の子供は、こんなおけいこをしてゐることを知らないでせう。

バラツク町の夜

深川區 川南尋常小學校

第四學年女

細川 つね子

夜になると私の家の前に、古着屋が出る。横町には神だなを賣る店がある。その外色々の品物を賣る夜店が、町の兩がはに出る。

家では晩の御飯を食へると、かわるゝ店番をする。表通りは夜になると電氣の光で震災前の様に明るい。

バラツクの家もよく見える。今はバラツクでも人通りが多いので、にぎやかである。九時頃にはよく男の子たちが、あたひがかつたゝと云つて、わいゝさわぐ聲が聞へる。何をしてゐるのでせう。お地ぞう様の夜は、とても人目が多くて歩けないバラツク町にも夜は震災が忘れられたやうである。

まだ見ぬ友へ

深川區 明治第二尋常小學校

第四學年女

篠原 美代子

此の間は御見舞狀を下さいまして、有難たうございます。昨年秋、九月一日の大震災で、花の都とまで歌はれた、あの東京も一日のうちに、焼野原となりました。其

の恐しかつた事をお話したいと思ひます。私はあの日に學校から歸つて、二階で洋服をぬいで居ります。

するとあの恐しい地震です。おごろいて机の下にはいつてしまひました。やむかと思ひますと、前より大きくなりました。

やつとやんでから外へ出ました。そのうちに、あちらからもこちらからも、火事がおこり夕方になると、風がだん／＼出て來ます。東風かと思ふと西風ですからたまりません。私はお父さんや、お母さんたちと、皆で商船學校へ避難をしました。見る／＼うちに其の學校へ火がうつり、音をたて、もえ始めました。學校や糧秣廠が焼けてしまつてから、すこしたつて夜が明けました。見るとお父さんがあません。一同の心配は一通ではありません。方々さがしましたら、やう／＼にしてめぐり合ふ事が出來ました。

そして糧秣廠から、牛のかんづめをもらつて來て、一日それを食べ、二日野宿して三日目には大井へ行き、一月八日にこの明治學校に歸つて來ました。私共四年生は皆このやうなかなしい目にあつた者ばかりで元は一組に七十人も居りましたが、今では半になりました。

私共一同はバラツクの中に、はいつて皆さんの送つて下さつた、本で勉強して居りますから御安心下さい。私は世界にまけない、元よりすぐれた帝都になるやうにしたいと思ひます。

寒さがきびしくなりますから、御体を御たいせつに、まづは御禮まで。さようなら
おなつかしき京都の友へ

アメリカのまだみぬ友へ

深川區 明治第二尋常小學校

第四學年女

石倉 志津子

まだお目にかゝつたことはありませんが、此の間は色々な物をいただきまして、まことに／＼ありがたう御座いました。

私は九月一日の大震災で焼けられた、ひなん民の一人でございます。私の家は東京市の深川といふ所にありましたが、あの火災で家もなにもみな焼かれてしまひました。が幸家内一同は、無事にひなんしました。今はバラツクと言ふ、トタン屋根の家で、毎日々々暮して居ります。學校も今はバラツクを建て、そこで勉強してゐます。そこ

へ貴女方に色々な物を、送つていたゞきましたから、その嬉しさはなんともたどへやうがございませぬ。きつと貴女方は、御自分のおこづかひを、おためになつてあはれな私達に送つて下さつたのでせう。なんだか女神様に物をいたゞいたやうな氣がします。ほんとうにありがたうございました。寒さがきびしくなりましたから、御体御大切にあそばせ。

なほ私のにげた時の様子を書きませう。お笑ひ下さい

二月二日

石倉志津子

おなつかしい

アメリカのお友達へ

恐ろしい一夜

深川區 明治第二尋常小學校

第四學年女

吉川セイ子

一、火煙黒煙その中を

みんなぞろぞろ

にげて行く

あゝ恐ろしの

火事のばん

二、私も一しよに

にげ出して

火のこがばらく

ちつて来る

あゝ恐ろしの

天この一夜

私の教室

深川區 靈岸尋常小學校

第四學年男

兒玉福之助

去年九月一日の大地震で私等の學校は焼けてしまつた。

二三日たつてから學校へ行つて見ると、二十人ぐらいいしかゐない。それから五六年度の

生徒が雲光院の庭に天幕を立てた。雨の降る日に學校に来るとござがぬれてゐる。その上にすわつて勉強したりした。毎日、天幕で勉強するのは、いやだけれ共仕方がない、その内バラツクの校舎がだんだん出来上がるのがたのしみであつた。僕は早く出来る様にと毎日まつてゐた。いよゝあたらしい校舎が出来上つた時は、何よりうれしかつた。校舎にはいつて見ると、天上を見ても机をみても、どこを見ても新しい、こんなに新しいがらすをこわしたり、机にらくがきをしたりしてはならないと思つた。あたらしい校舎にはいつてからは、天幕にゐた時よりも、もつとと勉強しなければなりません。

バラツクの家

深川區 靈岸尋常小學校

第四學年女 木村 さかゑ

九月一日の大震大火災の爲に、私の家は皆焼かれましたので、只今では大阪から寄

附して下さつた。バラツクの三號の四十一に住んでゐます。このバラツクは一棟が二十戸になつてゐて、一戸に六人づつ入つてゐます。所は靈岸寺の中であります。其の内の一號の棟は、バラツクにゐる私等の子供會をしたり、活動寫眞をうつしたり、お話を聞いたりするところになつてゐます。

此の家は天井もなし。かべもないのでとなりや、うしろの人々の話や、子供の泣き聲や、笑聲が、きこえて大そう、にぎやかです。朝から晩までさわぐのですから、病人など有る時は、さぞうるさかろうと思ひます。それから雨や、風のふいた時は大へん恐ろしい思ひをします。杉本さんの家も、すぐ近所にありますので仲よく遊びます。私が勉強してゐると、おとなりの姉さんが、間違つてゐる處など教へてくれます。

震災後日物語

深川區 猿江尋常小學校

第四學年男 田中 梅吉 (十三才)

此の震火災の爲何万となく死傷した。此の恐しい焰が人を呪つて、たくさんな人を殺したは憎くき致し方である。皆此の騒

ぎにびつくり仰天して大がいの者は田舎をさして逃げだした。これが忍術なら、よかつたものが實物だから、吃驚するのむりもない。一日の中に東京を焼はらつたのだから、見物に來た者は腰をぬかささんばかりに驚いた。東京でヒナンをした者はバラツクを作つて、これに入つて暮してゐたが、ひもじさをこらへてゐたが我慢が出来なくなつた。

父『アー腹が空いたもう我慢が出来なくなつたアー』

子供『アーたまんねー助けてくれアーたまんねへアーツ』

赤子『オギャー／＼／＼お乳が飲みたいオギャー／＼／＼』

母『アー赤子が出来た、御産婆がいなアー苦しアーツ』

こういう一家があつた。

まもなく田舎からお米が来る。

外國から品物がくるアーうれしい。

震 災 後

深川區 猿江尋常小學校

第四學年女

利 谷 フ サ 子

あのおそろしい地震があつてから、後東京市は前よりもすつと／＼さびしくなつて何所を見てもバラツクの家ばかりで、所々に西洋造の家がぼつ／＼残つてゐるばかりです。

淺草などは以前には大へんにぎやかであつたそうですが、今では前よりも餘程さびしくなつてゐるさうです。

夜八時から九時すぎになると、もう人通も少なくなつて家がたてられてゐます。

あの震災があつてから、後東京は全くさびしくなりました。

あの震災のためで、日本はどれだけびんぼうになつたでせうか。

私は早く前の通りになればよいといつも思つてゐます。

昭和十三年八月廿五日印刷
 大正十三年九月一日發行
 〔定價金壹圓貳拾錢〕
 東京市京橋區銀座二ノ一五
 株式會社 岡本洋行出版部
 右代表者 培風館
 山本慶治

493
 432
 925

大正十三年八月廿五日印刷
 大正十三年九月一日發行

〔定價金壹圓貳拾錢〕

★ 震災記念文集 第四集

著者

東京市役所

發行兼印刷者

東京市京橋區銀座二ノ一五
 株式會社 岡本洋行出版部
 右代表者 培風館
 山本慶治

發行所

東京市京橋區
銀座二ノ一五

培風館

〔電話青山三二六八〕
振替東京三二六一七

定價

圓一	金(二尋)	錢十七	金(一尋)
錢十二	圓一金(五尋)	圓一	金(三尋)
圓一	金(等高)	錢十三	圓一金(六尋)

☆

圖書集成醫部全錄

☆

大正十三年八月廿五日

圖書集成醫部全錄



圖書集成醫部全錄

第一全一冊	第二全一冊
第三全一冊	第四全一冊
第五全一冊	第六全一冊

288
218



東 京
培 風 館 發 行